

シン経済学習プラン・中学版

中学「公民分野」経済ユニット 授業プランv1

第 1 講～第 11 講

目次

講	タイトル	ページ
第 1 講	あの夜、当たり前が止まった ——暮らしはつながっている——	3
第 2 講	カレーライス、誰が作ったのか ——分業と交換——	9
第 3 講	知らない人と、なぜ取引できるのか ——お金と信頼——	16
第 4 講	競争はいいことか、それとも危ないか ——競争とルール——	23
第 5 講	見えない差が、社会を動かしている ——情報の差と信頼・信用——	30
第 6 講	「来月から来なくていい」と LINE が来た ——労働と生活——	36
第 7 講	ケンジの町のバスが、なくなる ——採算が取れなくても必要なものがある——	43
第 8 講	廊下の掃除と、税金の話 ——公共と税——	50
第 9 講	お父さんが、制度を使えなかった理由 ——社会保障——	57
第 10 講	商店街がどんどん閉まっていく ——合成の誤謬・財政政策・金融政策——	64
第 11 講	ケンジのスマホは、どこから来たのか ——国際経済と、旅の終わりに——	71
付録 1	学習指導要領で取り上げている経済用語との対応表	80
付録 2	索引	84

* Ctrl キーを押しながらクリックすると各講の冒頭にジャンプします。

* 最終ページに「本プログラムの著作権・利用範囲について」が掲載されています。ご確認の上、ご利用ください。

このプランの読み方・使い方

各講は 45～50 分の授業 1 コマを想定し、共通の構成で作られています。以下、各セクションの役割をまとめます。

◆ **前回から** 前講で学んだ内容と、本時のつながりを短く示す。生徒に「学びが積み重なっている」ことを意識させる。

◆ **授業の最初の 30 秒（知的な小さな衝撃）** 授業冒頭、生徒の興味を引くための発問・小さな驚き。台本形式になっているので、そのまま読み上げて使える。

◆ **今日の問い** その回の中心となる問い。授業全体を通じて生徒が答えを探っていく軸になる。

【今日の主軸となる基盤】 市場・インフラ・生活・制度の 4 つの基盤のうち、その回で重点的に扱うものを示す表。◎は主軸、○は関連、－は対象外を表す。

📖 ケンジとアカリの物語

生徒に読み聞かせる、あるいは配布して読ませる物語本文。ケンジ（仕組みを分析する視点）とアカリ（公正さを問う視点）という対照的な二人の視点が、全 11 講を通じて繰り返し登場する。

グループで話し合おう 物語の中の対立や問いをもとに、グループで意見を交わす活動。

◎ **別の切り口** クラスの実態や時間の都合に応じて、導入や発問を入れ替えるための代替案。

【授業の流れ】 ステップごとの時間配分とねらい。各ステップには教師向けの進行上の注意点（交通整理）を地の文で添えている。

✍ **板書案** 授業の最後に黒板に残しておきたい内容のイメージ。

▶ **体験活動** 体感的に理解を深めるための活動。時間に余裕があれば実施する。

確認問題（○×＋理由） 理解度を確認するための○×問題。解説は問題ごとに地の文で続けている。

◇ **振り返りの問い** 授業のまとめとして生徒に書かせる問い。解答例を添えているので、採点の目安として使える。

★ **自分の言葉へ** 振り返りの最後に、生徒自身の言葉でその日の学びをまとめさせるための一言。

◆ **今日の持ち帰り** その回で生徒に持ち帰ってほしい要点のまとめ。次回への接続も示す。

▼ **教師メモ** 指導上のねらいや留意点、背景知識など、教師だけが読む部分。

【観点別評価】 各講の末尾に、「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の 3 観点で A・B・C の目安を示す。通知表・指導要録の観点別評価にそのまま対応させて使える。

【C の生徒を引き上げるヒント】 観点別評価で C がつきやすい生徒を、その講の中の別の切り口・体験活動・確認問題の解説などを使ってどう引き上げるかを簡潔に示す。

使い方のヒント

・時間配分はあくまで目安です。クラスの実態に応じて調整してください。

・「教師メモ」は生徒に配布・提示しない前提で書かれています。

・観点別評価は、定期考査や通知表の作成にそのまま活用できます。

・全 11 講は一つの物語としてつながっているため、順番通りに進めることを推奨しますが、関心のある項目を取り出して使うことも可能です。また、導入の物語を先生方の関心で広げることができます。

第 1 講

あの夜、当たり前が止まった ——暮らしはつながっている——

◆ 授業の最初の 30 秒（知的な小さな衝撃）

先生は黒板に数字だけ書く。「38」「これは何の数字でしょう。」

（生徒が考える。答えは「日本の食料自給率（％）」。つまり今食べているものの 6 割以上は、外国から来ている。もし輸入が止まったら？）

→そのまま物語へ。

◆ 今日の問い

私たちの「当たり前の毎日」は、どんな仕組みに支えられているのだろうか。

【今日の主軸となる基盤】

A 市場	B インフラ	C 生活	D 制度
◎ 生産・消費	◎ エネルギー・物流	◎ 生活・安全	◎ ルール・支え合い

📖 ケンジとアカリの物語 第 1 話 停電 2 日目の朝

大型台風が直撃した翌朝、ケンジとアカリの町はまだ停電が続いていた。

ケンジの家では冷蔵庫が止まり、昨日の夕飯の残りが傷みかけている。スマホの充電は残り 8%。

近所のコンビニも昨日から閉まったままだ。そのとき、隣の家の中田さん（79 歳・独り暮らし）が窓から顔を出した。「ケンジくん、うちの薬がもう今日で終わりなんだけど……」

ケンジは思った。「中田さんを助けに行きたい。でも家族の食料はどうなるんだろう」

一方アカリの家では、お母さんが「職場に連絡できない。明日どうやって出勤するんだろう」とつぶやいていた。

アカリは思った。「電気が止まっただけなのに、なんでこんなに全部が止まるんだろう」

ケンジは田中さんの家の前で立ち止まった。「誰かが助けに行くだろう」——そう思っている人は、この町に自分だけではないかもしれない。

アカリは考え続けていた。「電気・食料・薬・通信……これらは別々のはずなのに、なぜ一緒に止まるんだろう」

——ケンジはどう動くか。アカリは何を考えるか。自分の家族を守ることと、田中さんを助けることは両立できるか。「誰かがやるだろう」と全員が思ったら、どうなるのか。

グループで話し合おう

【あの夜、あなたなら】

家族の食料を守る

ある食料は家族の分だけ。田中さんのことは行政や近所の誰かに任せよう。でも「誰かがやるだろう」と全員が思ったら、田中さんは本当に助けてもらえるのか。（アカリの問い：仕組みとして何が起きているか）

田中さんを助けに行く

を届ければ田中さんは助かるかもしれない。でも自分の家族の安全や食料は誰が守るのか。一人の善意だけで両方を守れるのか。（ケンジの問い：自分は今どう動くか）

▶ この場面が教えてくれること

停電という一つの出来事が、食料・薬・通勤・近所づきあいなど、いくつかの基盤に同時に影響していた。「自分はどう動くか」というケンジの問いと、「なぜ仕組みごと止まるのか」というアカリの問い——この二つが合わさって初めて、当たり前の毎日を支える仕組みの全体が見えてくる。

◎ 別の切り口（クラスの実態に合わせて入れ替え可）

【よりやさしい切り口】「もし今日、家の電気が1日止まったら、何に困るか——できるだけ多く書き出してみよう」

【より深い切り口】「日本の食料自給率は約38%、エネルギー自給率は約13%（2023年度）。『当たり前』はどれくらい他人任せなのかを数字で考えよう」

【授業の流れ】

ステップ1 物語を読み、「自分ならどうするか」を書く（7分）

物語を読み上げ、「ケンジの選択」と「アカリの問い」のどちらに近いかをノートに書かせる。

✦ 交通整理

「正しい答え」を急がせない。この段階では、家族と田中さんのどちらを優先するかを決めにくいという感覚そのものを全員に体感させることが目的。

ステップ2 グループ議論：「なぜ決めにくいのか」（10分）

グループで「あなたならどうする？」を話し合わせる。先生は各グループを回り、意見を聞くだけ。

◆ 交通整理

「家族か、田中さんか」に結論を出させる必要はない。「一人の努力や善意だけでは解決しきれない」という感覚が出てきたら、それを拾って板書しておく—ステップ3への布石になる。

ステップ3 「なぜふだんはうまくいくのか」を問い返す（12分）

「では、ふだんはなぜこの問題が起きないのか？」を全体に問う。生徒の言葉を黒板に並べ、市場・インフラ・生活・制度という4つの枠に分類していく。

◆ 交通整理

生徒からは「コンビニがある」「電気が来ている」「薬局がある」など具体例が出る。それぞれがどの基盤に属するかを一緒に整理し、「ふだんは4つの基盤が同時に動いているから気づかない」という気づきに導く。

ステップ4 まとめ：4つはつながっている（8分）

「4つの基盤はどれか一つが止まると他にも影響が出る」を確認する。冒頭の「38」（食料自給率）に戻り、「輸入という見えないつながりも同じ構造だ」と結ぶ。

◆ 交通整理

ケンジの視点（今、目の前でどう動くか）とアカリの視点（なぜこの仕組みはこうなっているのか）が、今日初めて対比として登場したことを意識しておく。この対比はこれから11講を通じて繰り返し使う型になる。

✍ 板書案（最終的に黒板に残す内容）

★ 当たり前の毎日を支える4つの基盤

停電という一つの出来事

↓ 影響が広がる

食料・薬（生活）／通勤（インフラ）／近所づきあい（制度）……

↓ なぜ一緒に止まるのか

市場・インフラ・生活・制度は、ふだんから互いに支え合って動いている

ケンジの問い：今、目の前で自分はどう動くか

アカリの問い：なぜこの仕組みはこうなっているのか

→ 両方の問いが、これからの学びを支える

▶ 体験活動

黒板に「スマホが使えなくなった」と書き、「そのために必要なものは？」を生徒に次々に挙げさせ、矢印でつないでいく（電池→充電→電気→発電所→燃料→輸送……）。分岐が増えていく様子を可視化し、「当たり前」が実は多くの仕組みの上に成り立っていることを体感させる。

追加の問い：

- ・「学校の中で『当たり前』を支えている仕組みを探してみよう」
- ・「もし 1 週間、電気だけでなく水道も止まったら、何が一番困るか」

確認問題（○×＋解説）

Q1 「日本の食料自給率は約 38%であり、これは食べているものの半分以上を海外からの輸入に頼っていることを意味する。」

→ ○ 【解説】食料自給率約 38%は、国内で消費するカロリーのうち国内生産でまかなえる割合を示します。残りの約 62%は輸入に頼っており、輸入が止まれば大きな影響が出ます。

Q2 「停電のような出来事はインフラだけの問題であり、生活や制度には関係しない。」

→ × 【解説】停電（インフラ）は、薬が買えない・冷蔵庫が止まるといった生活の問題や、誰が高齢者を助けるかという制度の問題にもつながります。4 つの基盤は互いに結びついています。

Q3 「『誰かがやるだろう』と全員が思うと、実際には誰も動かないことがある。」

→ ○ 【解説】これは社会的ジレンマと呼ばれる構造です。個人の合理的な判断（自分がやらなくても誰かがやるだろう）が積み重なると、全体としては誰も動かないという結果を生むことがあります。

Q4 「『当り前の毎日』がふだん意識されないのは、それを支える仕組みが存在しないからだ。」

→ × 【解説】むしろ逆です。市場・インフラ・生活・制度という仕組みが常にうまく機能しているからこそ、私たちはそれを意識せずに済んでいます。仕組みが止まって初めてその存在に気づきます。

Q5 「台風で電気が止まっても、水道や道路は電気とは全く別の仕組みなので影響を受けない。」

→ × 【解説】浄水場のポンプや信号機なども電気で動いていることが多く、停電は水道や交通にも影響することがあります。仕組みは見えないところで互いに支え合っています。

◇ 振り返りの問い

1. 「スマホが使えること」を 4 つの基盤それぞれと結びつけて書こう。

【解答例】A 市場：スマホや電池を作る会社が生産・販売している。B インフラ：電気・通信回線が届いている。C 生活：充電したり使ったりする自分の生活習慣。D 制度：通信を守る法律や、災害時に通信会社が復旧を急ぐルールがある。

2. 「市場さえあれば社会はうまくいく」に賛成か反対か。理由とともに書こう。

【解答例】（反対の例）市場だけでは、お金を払えない人や、そもそも売り手がない地域には届かない。インフラ・生活・制度が支えて初めて「当り前の毎日」が成り立つ。

3. ケンジの視点とアカリの視点、あなたはどちらに近かったか。授業を通じてどちらの視点も必要だと思った場面を書こう。

【解答例】（自由記述の例）最初はケンジの視点（自分がどう動くか）で考えていたが、「なぜふだんは大丈夫なのか」を考えるうちに、アカリの視点（仕組みそのものを問う）も必要だと感じた。

★ 自分の言葉へ

「確認問題と振り返りが終わりました。では最後に 30 秒。『当たり前の毎日はなぜ成り立っているのか』——ケンジの言葉でもアカリの言葉でも、自分の言葉で書いてください。」

◆ 今日の持ち帰り

当たり前の毎日は、市場・インフラ・生活・制度という 4 つの仕組みが全部動いて成り立っている。その仕組みは、「個人がどう動くか」と「社会がどう設計されているか」という二つの問いで支えられている。

▷ 次回へ 次回は、4 つの基盤のうち最初の基盤——誰がどうやってものを作り、届けているのか——を見ていく。

★ 授業後に生徒が自分の言葉で言えるようにしたいこと（先生だけが読む）

「当たり前の毎日は、市場・インフラ・生活・制度という 4 つの仕組みが同時に動いているから成り立っている。どれか一つが止まると他にも影響が広がる。そして、自分はどう動くか（ケンジ）と、なぜこの仕組みはこうなっているのか（アカリ）、両方の問いが必要だ」と生徒が自分の言葉で言える。

▼ 教師メモ

【ねらい】

「市場・インフラ・生活・制度の定義を覚える」ことよりも、「当たり前の毎日」がこの 4 つの仕組みに同時に支えられているという実感を持たせることが核心。あわせて、以降の講を貫く 2 つの視点——「今、目の前で自分はどう動くか」（ケンジ）と「なぜこの仕組みはこうなっているのか」（アカリ）——を、教師が説明するのではなく、ステップ 1・2 での生徒自身の反応から自然に立ち上げることを目指す。

【ケンジとアカリの使い方】

この第 1 講は、ケンジとアカリの視点の違いが初めて登場する回である。ここで急いで一般化・定義づけをせず、ステップ 1・2 で出てきた生徒の言葉をそのまま「ケンジっぽい考え方」「アカリっぽい考え方」として拾い上げる程度にとどめる。この対比は今後の講でも繰り返し使う型になるため、無理に完成させる必要はない。

【ステップ 2 の議論について】

「家族を守るか、田中さんを助けるか」に正解を出させようとしなない。この「決めにくさ」そのものが今日のねらいである。個人の努力や善意だけでは解決しきれない構造があることに気づかせ、その気づきをステップ 3 の「では、ふだんはなぜこの問題が起きないのか」につなげる。

【自助・共助・公助について】

災害時の「誰が田中さんを助けるか」という問いは、高校でも扱う「自助・共助・公助」という枠組みの入口になる。中学段階では用語を急いで教える必要はないが、「家族だけ（自助）」「近所の人（共助）」「行政・消防（公助）」という区別が生徒の発言の中に自然に出てきたら、教師のメモとして意識しておくといよい。

【観点別評価】

① 知識・技能

A：市場・インフラ・生活・制度という 4 つの基盤の特徴を正しく理解し、停電の物語に登場する具体的な出来事（食料・電気・薬・通勤など）を、それぞれの基盤に整理して分類できる。

B：4 つの基盤の名称や大まかな内容は覚えているが、具体的な出来事をどの基盤に当てはめるか迷うことがある。

C：4 つの基盤を区別して理解できていない。

② 思考・判断・表現

A：「今、自分はどう動くか」というケンジの視点と、「なぜこの仕組みはこうなっているのか」というアカリの視点の違いを踏まえ、当たり前前の生活がどのように支えられているか、根拠を示しながら自分の言葉で説明できる。

B：二つの視点があることは説明できるが、根拠を示しながら自分の考えとして表現するまでには至らない。

C：一つの視点からのみ出来事を捉え、多面的に説明することが難しい。

③ 主体的に学習に取り組む態度

A：停電の物語を自分の生活に引き寄せて考え、「誰かがやるだろう」という状況が自分の身の回りにもないかを粘り強く探ろうとしている。

B：物語の内容には関心を持って取り組んでいるが、自分の生活と結びつけて考えようとする姿勢は限定的である。

C：物語を出来事としてのみ受け止め、自分との関わりを考えようとする姿勢が見られない。

【C の生徒を引き上げるヒント】

【よりやさしい切り口】で身近な例を書き出させてから、体験活動の分岐図と板書案を使って 4 つの基盤に仕分けさせるとよい。確認問題 Q3 の解説（社会的ジレンマ）を身近な例に当てはめさせるのも有効。

【学習指導要領との対応】

公民的分野「私たちと経済」の導入部分。現代社会における相互依存関係、対立と合意・効率と公正などの見方・考え方を、以降の学び全体の土台として位置づける。

第 2 講

カレーライス、誰が作ったのか ――分業と交換――

◆ 前回から

第 1 講で「当たり前の毎日は 4 つの仕組み（市場・インフラ・生活・制度）がつながって成り立っている」ことを学んだ。今日はその最初の基盤――「市場（A 基盤）」の核心から始める。

◆ 授業の最初の 30 秒（知的な小さな衝撃）

先生は問う。「今日の給食のカレーに関わった人は何人でしょう。5 人？ 50 人？ 500 人？ 隣の人と予想してみてください。」

（生徒が予想する。答えは後で確認させる）

→そのまま物語へ。

◆ 今日の問い

私たちが毎日使うものは、誰がどんなつながりの中で作り、届けているのだろうか。

【今日の主軸となる基盤】

A 市場	B インフラ	C 生活	D 制度
◎ 生産・分業・交換	◎ 物流・輸送	—	—

📖 ケンジとアカリの物語 第 1 話 給食のカレーを食べながら

給食の時間、ケンジは今日のカレーライスをひと口食べた。「うまい」と思ったとき、ふと疑問が浮かんだ。
「このカレー、誰が作ったんだろう」

調理員の山田さんが作った。でも山田さんが作れたのは食材が届いたから。食材を運んだのはトラック運転手の人。野菜を育てたのは農家。農家がトラクターを動かしたのは燃料があったから。燃料を精製したのは……

ケンジはどこまでさかのぼっても終わりが見つからないことに気づいた。「俺、このカレーを作った人の名前、一人も知らない」

隣でアカリが別のことを考えていた。「このカレーの野菜、どこで作られたんだろう。国産？外国産？もし輸入が止まったら給食はどうなるんだろう」

そこへ翌週、学校から連絡が来た。「物流費の値上がりと人手不足で、来年度から給食業者が撤退します。」

ケンジは思った。「仕事のつながりがどこかで切れると、こんなことが起きるのか」

アカリは思った。「給食がなくなったら、一番困るのは誰だろう」

——二人の問いはどこが違うか。あなたはどちらの問いに近いか。

グループで話し合おう

【給食業者撤退への対応】

お弁当持参にする

学校のコストは減る。でも毎朝弁当を作れない家庭、お金が厳しい家庭の子はどうなるか。（アカリの問い：誰が困るか）

有料デリバリー（1食 600円）に変える

給食は続く。でも 600 円払えない家庭の子だけお弁当という状況は公正といえるか。仕組みとしてどう解決するか。（ケンジの問い：仕組みとして何が起きているか）

▶ この場面が教えてくれること

給食は「業者・物流という市場の仕組み」と「教育の機会均等という社会の仕組み」の両方で動いていた。ケンジが気づいた「つながり」と、アカリが問うた「誰が困るか」——この二つの視点が合わさって初めて問題の全体が見える。

◎ 別の切り口（クラスの実態に合わせて入れ替え可）

【よりやさしい切り口】「今日の朝ごはんが食卓に届くまでに、何人の仕事に関わっているか——図にしてみよう」

【より深い切り口】「日本の食料自給率は約 38%。輸入が止まったら——分業のメリットとリスクを考えよう」

【授業の流れ】

ステップ 1 物語を読み、「どこまでさかのぼれるか」を試みる（8 分）

物語を読み上げ、「カレーを作った人を、できるだけ多く書き出そう」とノートに書かせる。冒頭の予想（5 人？ 50 人？ 500 人？）と照らし合わせる。

✦ 交通整理

「農家」で止まったら「農家が使うトラクターは誰が作った？」と一歩先を問う。「無限に続く」という感覚を持たせることが目標。冒頭の予想より実際の関わりの方がはるかに多いことへの驚きを引き出す。

ステップ 2 「生産ゲーム」で分業の効果を体感（14 分）

「書く係・切る係・まとめる係」に分けて生産ゲームを行う。「自給型」→「分業型」の順で試させ、なぜ差が出たかを考える。

✦ 交通整理

「交換するには何が必要か」を問うと「お金？ 信頼？ ルール？」が出てくる。「信頼」が出たら板書に書き留めておく——次の第 3 講への布石だ。アカリ的な問い「得をする人と損をする人はいるか」も出れば板書に残す。

ステップ 3 給食問題で「市場と生活のつながり」を確認（12 分）

「業者が撤退する＝市場の基盤が止まる→給食がなくなる→子どもの食（生活の基盤）に影響→公費でどこまで補うか（制度の基盤）」という連鎖を全体で確認する。

✦ 交通整理

ケンジの問い（仕組みとして何が起きているか）とアカリの問い（誰が一番困るか）を黒板に並べて示す。「この二つの問いはどちらが正しいか？」ではなく「どちらも必要だ」という方向に整理する。

ステップ 4 まとめ（6 分）

「分業→交換→つながり→信頼が必要」という流れを板書して締める。冒頭の予想（何人関わっているか）に戻り「実際は何人だったか」を確認する。

✦ 交通整理

「知らない人たちの分業と交換で自分の食事が成り立っている」という実感で締める。ケンジの問いとアカリの問いが「両方必要だ」という結論に至ったことを確認する。

✍ 板書案（最終的に黒板に残す内容）

★ 分業と交換

希少性（時間・土地・知識が足りない）

↓ だから

得意なことに集中する = 分業

↓ そのためには

互いの仕事を交換する = 交換

↓ 交換には

「受け取ってもらえる」という 信頼 が必要

ケンジの問い：つながりがどこかで切れると何が起きるか

アカリの問い：その仕組みの中で誰が得をし、誰が困るか

→ 両方の問いが経済を考えるために必要だ

▶ 体験活動

「書く係・切る係・まとめる係」に分けて生産ゲームを行う。最初は一人で全部やる「自給型」。次に役割分担する「分業型」。どちらが多く・早くできたかを比べ、なぜ差が出たかを考える。

追加の問い：

- ・「交換するには何が必要か？（お金？信頼？ルール？）」
- ・「分業で得をするのは誰か。困るのは誰か」

確認問題（○×＋解説）

Q1 「分業をすると、一人ひとりが得意なことに集中できるため、全員が全部やるより生産量が増える。」

→ ○ 【解説】これが分業の最大のメリットです。作業の切り替えが減り、熟練度が上がることで生産効率が高まります。今日の生産ゲームで体感したことがまさにこれです。

Q2 「給食業者が撤退したのは市場の基盤だけの問題であり、生活の基盤や制度の基盤には影響しない。」

→ × 【解説】市場の基盤（業者撤退）が止まると、生活の基盤（子どもの食の確保）に直接影響します。さらに制度の基盤（教育の機会均等をどう守るか・公費でどこまで補うか）の問題にもつながります。4つの基盤はつながっています。

Q3 「物々交換よりお金を使った交換の方が便利なのは、お金が価値の尺度・交換手段・貯蔵という3つの働きを持つからだ。」

→ ○ 【解説】物々交換では「自分の持つものを相手が欲しがり、かつ相手の持つものを自分が欲しい」という二重の一致が必要です。お金はこの問題を解決します。お金の3つの働きは次の第3講で詳しく扱います。

Q4 「分業が広がると知らない人との取引が増えるが、それは経済にとって問題ではなく、むしろ信頼の仕組みが不要になることを意味する。」

→ × 【解説】逆です。分業が広がるほど知らない人との取引が増え、だからこそ信頼の仕組みがより重要になります。顔の見えない相手との取引を成り立たせる「信頼の仕組み」については次の第3講で詳しく扱います。

Q5 「日本の食料自給率は約38%であるため、輸入が止まると国内生産だけでは国民全員の食料をまかなえなくなる可能性がある。」

→ ○ 【解説】食料自給率約 38%は、国内で消費するカロリーのうち国内生産でまかなえるのが約 38%という意味です。輸入が止まると残りの約 62%が不足します。分業と交換は国際的にも広がっており、その恩恵と同時にリスクも存在します。

◇ 振り返りの問い

1. 今日の朝ごはんが食卓に届くまでに、どんな人の仕事関わっているか、できるだけ多く書こう。

【解答例】農家→食品会社（加工・包装）→トラック運転手（配送）→スーパー（販売）→電力会社（調理・冷蔵）→水道→道路など。

2. 「分業があるとなぜ生産が増えるのか」を今日の体験を使って説明しよう。

【解答例】全員が全部作ろうとすると作業の切り替えが多く非効率。分業では各自が 1 つに集中できるため熟練度が上がり生産速度が増す。

3. 給食がなくなった場合、ケンジの問い（仕組みとして何が起きているか）とアカリの問い（誰が一番困るか）それぞれの視点から考えよう。

【解答例】ケンジの視点：B インフラ（物流コスト高騰・人手不足）→A 市場で業者が撤退→C 生活（子どもの食の確保）→D 制度（教育の機会均等をどう守るか）という連鎖が起きている。アカリの視点：600 円払えない家庭の子ども・毎朝弁当を作れない家庭が一番困る。どちらの視点も問題の解決に必要な。

★ 自分の言葉へ

「確認問題と振り返りが終わりました。では最後に 30 秒。『私たちが毎日使うものが届くのはなぜか』——ケンジの言葉でもアカリの言葉でも、自分の言葉で書いてください。」

◆ 今日の持ち帰り

私たちが使うものは、知らない人たちの分業と交換のつながりの中で作られ、届けられている。そのつながりの中で「何が起きているか」と「誰が困るか」の両方を問うことが、経済を考える出発点だ。

▷ 次回へ 分業が広がるほど「知らない相手」との取引が増える。その取引を成り立たせているものは何か——次回は「お金と信頼」を見る。

★ 授業後に生徒が自分の言葉で言えるようにしたいこと（先生だけが読む）

「今日の朝ごはんは、会ったことのない何十人もの人に分業と交換できている。そのつながりのどこかが切れると自分の生活に影響が出る。そして、そのつながりの中で得をする人と困る人がいる」と生徒が自分の言葉で言える。

▼ 教師メモ

【ねらい】

「分業と交換の定義を覚える」より「自分の食事が無数の知らない人のつながりで成り立っている」という実感が核心。冒頭の予想（何人関わっているか）と授業後の答え合わせで、その実感を引き出す。

【信頼の布石】

体験活動の最後「交換するには何が必要か」で「信頼」が出たら板書に残す。第3講で「そうか、あれが大事だったのか」と回収できる。

【観点別評価】

① 知識・技能

A：分業・交換（市場）と物流・輸送（インフラ）という言葉の意味を理解し、カレーライスが手元に届くまでの過程を、それぞれの基盤に対応づけて整理できる。

B：分業や物流という言葉は知っているが、カレーの具体例をもとに市場とインフラの基盤に区別して整理することが難しい。

C：分業・交換・物流の意味を理解できていない。

② 思考・判断・表現

A：給食に牛肉が使えなかった問題を、生産・輸送・保存など複数の基盤が連鎖して影響し合う出来事として、順序立てて説明できる。

B：一つの問題が複数の基盤に関わることには気づいているが、連鎖の順序を整理して説明することが難しい。

C：問題を単一の原因・単一の基盤の出来事としてのみ捉えている。

③ 主体的に学習に取り組む態度

A：自分が普段口にしている食べ物や身の回りの品物について、「誰がどうやって届けているのか」を自分から調べたり考えたりしようとしている。

B：授業の中でカレーライスの事例には関心を持つが、自分の身の回りの品物に置き換えて考えようとする姿勢は限定的である。

C：分業や物流を教材の中の出来事として捉えるにとどまり、自分の生活と結びつけようとしていない。

【Cの生徒を引き上げるヒント】

【よりやさしい切り口】（朝ごはんが届くまでの人数探し）から入り、板書案の「希少性→分業→交換→信頼」の流れを穴埋め形式でなぞらせる。振り返りの問い1の解答例を文型として使うと書きやすい。

【習指導要領との対応】

公民的分野「私たちと経済」――市場の働きと価格、生産と労働の基礎。

第3講

知らない人と、なぜ取引できるのか ――お金と信頼――

◆ 前回から

第2講で「分業が広がると知らない人との取引が増える」ことを学んだ。では顔を見たことのない相手に、なぜお金を渡せるのか。

◆ 授業の最初の30秒（知的な小さな衝撃）

先生は問う。「フリマアプリで買い物したことがある人？（挙手）。では、なぜ会ったこともない人にお金を払えたのか、30秒で隣の人に説明してみてください。」

（生徒が説明する。うまく説明できない生徒が多いはず）

「今日はその『なぜ』を考えます。」

→そのまま物語へ。

◆ 今日の問い

知らない相手とも取引できるのは、どんな仕組みや約束があるからなのか。そしてその根底にある「信頼」は、経済社会全体をどのように支えているのか。

【今日の主軸となる基盤】

A 市場	B インフラ	C 生活	D 制度
◎ 取引・貨幣	◎ 決済・通信	—	◎ 契約・信頼

📖 ケンジとアカリの物語 第2話 フリマアプリで3,500円が消えた

ある日、ケンジが帰宅すると、お母さんが暗い顔でスマホを見ていた。「健康食品を無料お試しで申し込んだら、2か月目から毎月5,000円引き落とされてた」と言う。

申し込みのときに「定期購入の解約は 30 日前までに連絡」という文字があったが、それは画面の隅の小さな文字だった。「利用規約に書いてあったはずだけど……全部読んでたら 30 分かかるよ。そんなの読む人いる？」とお母さんはつぶやいた。

翌日、アカリにこの話をした。アカリはすぐに言った。「うちのお母さんも同じことあったよ。パートで働いてやっと稼いだお金なのに、気づいたら引き落とされてた。しかも解約しようとしたら電話が繋がらないし」ケンジは思った。「これって、だました会社が悪いのか。読まなかったお母さんが悪いのか」

アカリが別の角度から考えた。「悪いのが誰かより、こういふことが起きないようにする仕組みはないのかな。うちみたいにお金に余裕がない家は、5,000 円でも本当に痛いんだよね」

ケンジは少し考えてから言った。「フリマアプリって、知らない人から買っているのに、なぜ安心できるんだろう。評価が良かったから？でも評価ってそもそも何を信じてるんだろう」

アカリが言った。「1 万円札だって紙じゃん。なぜ食べ物が買えるの？フリマの信頼とお金の信頼って、根っこは同じじゃない？」

——ケンジとアカリ、二人の問いはどこが違うか。

ケンジ：「安心して取引できる仕組みが機能しなかったのは誰のせいかな」

アカリ：「そもそも取引を成り立たせる『信頼』の正体は何か」

グループで話し合おう

自分の判断ミスだからあきらめる

「知らない人を信用した自分が悪い」と考えると、今後フリマは使えなくなる。でも全員がそう思い始めたら、フリマ市場全体はどうなるか。（ケンジの問い：誰のせいかな）

プラットフォームに強く抗議する

補償制度を使えば取り戻せるかもしれない。でも「なぜ最初から安心して取引できる仕組みがあるのに機能しなかったのか」を考えてみよう。（アカリの問い：仕組みの問題）

▶ この場面が教えてくれること

フリマで取引できるのは「評価システム・補償制度・受け取り確認後に支払う仕組み・運営会社への信頼」という仕組みがあるからだ。お金も同じく「社会全体が価値を認める」という信頼で成り立っている。信頼の仕組みが壊れると市場そのものが崩壊する。そして信頼は信用へ、信用は金融へとつながっていく。

◎ 別の切り口（クラスの実態に合わせて入れ替え可）

【より身近な切り口】「友達からゲームをタダでもらうとき、なぜかお金を払いたい気持ちになる——お金はなぜ関係を『対等』にするのか」

【より深い切り口】「完全キャッシュレス化は正しいか——効率とデジタル格差・公正のトレードオフ」

【授業の流れ】

ステップ 1 物語を読み、「ケンジは何を信じていたのか」を考える（10 分）

物語を読み上げ、グループで「ケンジは何を根拠に 3,500 円を払えたのか」を話し合わせる。

✦ 交通整理

「評価が良かったから」が出たら「評価がなかったら払えたか？」と問い返す。ケンジの問い（仕組みの問題）とアカリの問い（信頼の正体）を黒板に並べる。どちらの問いも「信頼」という同じ答えに向かっていることを確認する。

ステップ 2 「なぜ 1 万円札で食べ物を買えるのか」から本質へ（8 分）

「1 万円札は紙だ。なぜ食べ物を買えるか？」と問う。「日本銀行が保証」「みんなが信じている」が出てくる。「お金の本質は信頼」と板書する。

✦ 交通整理

第 2 講の「交換には信頼が必要」と接続させる。「お金もまた信頼の仕組みだ」という流れで返す。アカリの問い「フリマの信頼とお金の信頼は同じ根っこ」という気づきを確認する。さらに「信頼→信用（経済的な裏付けのある評価）→金融（お金を貸し借りする仕組み）」という連鎖も板書に加える。

ステップ 3 「物々交換ゲーム」でお金の必要性を体感（12 分）

役割カード（パン・ジュース・ノート・消しゴム等）を配り、欲しいものを物々交換で手に入れようとする。うまくいかない場面を体験させた後、「お金カード」を導入して解決する。

✦ 交通整理

「なぜスムーズになったか」を生徒に言わせる。先生がまとめるより生徒が自分で気づく方が腑に落ちる。「なぜゲーム内通貨と日本円は違うのか？」という問いも出してみる。

ステップ 4 まとめ：信頼の仕組みを整理する（10 分）

フリマの仕組み（評価・補償・受け取り確認後に支払う仕組み）を板書し「これらがなければ取引は成立しない」と確認。「経済の根っこ＝信頼」と板書して締める。

✦ 交通整理

「じゃあ信頼がなくなったら？」と問うと「市場が崩壊する」が出てくる。ケンジの問い（誰のせい）とアカリの問い（信頼の正体）が同じ答えに行き着いたことを確認して締める。

✍ 板書案（最終的に黒板に残す内容）

★ お金と信頼

お金の本質 = みんなが「価値がある」と信じる仕組み

お金の 3 つの働き：①交換手段 ②価値の尺度 ③貯蔵

フリマが成立する理由：

- ①評価システム（過去の行動が見える）
- ②補償制度（届かなければ返金）
- ③受け取り確認後に支払う仕組み（届いた確認後にお金が渡る）

→ これらがなければ「知らない人との取引」は成立しない

信頼 → 信用（経済的な裏付けのある評価） → 金融

クレジット = 「信じる」が語源

経済の根っこ = 信頼

ケンジの問い：仕組みが機能しなかったのは誰のせいかな

アカリの問い：取引を成り立たせる「信頼」の正体は何か

→ どちらの問いも「信頼の仕組み」という同じ答えに向かう

▶ 体験活動

役割カード（パン・ジュース・ノート・消しゴム等）を配り、欲しいものを物々交換で手に入れようとする。「お金カード」を導入するとなぜスムーズになるかを自分の言葉で説明する。

追加の問い：

- ・「なぜゲーム内通貨と日本円は違うのか？」
- ・「信頼がなくなったら市場はどうなるか」

確認問題（○×＋解説）

Q1 「お金は日本銀行が価値を保証しているから使えるのであり、みんなが信じているかどうかは関係ない。」

→ × 【解説】日本銀行の保証は信頼の仕組みの一部ですが、より根本的には「社会全体がその価値を認めている」という信頼があるから使えます。もし社会全体がお金の価値を信じなくなれば（極端なインフレなど）、日本銀行が保証していても取引は成立しなくなります。

Q2 「物々交換よりお金を使った交換の方が便利なのは、お金が交換手段・価値の尺度・貯蔵という 3 つの働きを持つからだ。」

→ ○ 【解説】物々交換では「自分の持つものを相手が欲しがり、かつ相手の持つものを自分が欲しい」という二重の一致が必要です。お金はこの問題を解決し、異なるものを同じ単位で比べ、今日稼いだものを将来使うことも可能にします。

Q3 「フリマアプリで安心して取引できるのは、出品者の評価が高ければ十分であり、補償制度や受け取り確認後に支払う仕組みは必要ない。」

→ × 【解説】評価だけでは不正を完全には防げません。補償制度（届かなければ返金）や受け取り確認後に支払う仕組み（到着確認後に支払い）という複数の仕組みが重なって初めて「知らない人との取引」が成立します。信頼は一つの仕組みではなく複数の仕組みが重なって作られます。

Q4 「経済の取引を成り立たせている根底には、お金・評価システム・補償制度など様々な形の『信頼の仕組み』がある。」

→ ○ 【解説】これが今日の授業の核心です。フリマの取引も、お金での売買も、すべて「相手が約束を守る」「仕組みが機能する」という信頼があるから成立します。信頼の仕組みが崩れると市場そのものが機能しなくなります。

Q5 「フリマアプリで詐欺に遭った場合、それは『知らない人を信じた自分が悪い』という自己責任の問題であり、プラットフォームや制度には関係がない。」

→ × 【解説】自己責任論には限界があります。プラットフォームが補償制度・評価システムを整備するのは、取引を安全にする責任があるからです。また消費者保護の制度も関係します。「信頼の仕組み」は個人だけでなく、プラットフォーム・制度・社会全体で作るものです。困ったときは消費生活センター（188 番）に相談しましょう。

◇ 振り返りの問い

1. お金の 3 つの働きを、自分の生活の具体例で説明しよう。

【解答例】①交換手段：コンビニで 150 円のおにぎりとお金を交換できる。②価値の尺度：おにぎり 150 円・ゲーム 7,000 円と異なるものを同じ単位で比べられる。③貯蔵：今日もらったお小遣いを来月使える。

2. 「偽札でおにぎりを買えない」のはなぜか。「信頼」という言葉を使って説明しよう。

【解答例】偽札は「社会全体がそれを受け取って使える」という信頼を持っていない。お金は「国や社会がその価値を保証する」という信頼で成り立っているため、その信頼がない偽札では取引が成立しない。

3. フリマアプリで安心して取引できる仕組みをできるだけ多く書き、それぞれがどんな「信頼」を作っているかを説明しよう。

【解答例】①評価システム：過去の行動が見えることで相手の信頼度がわかる。②補償制度：届かなければ返金されることで損するリスクが減る。③受け取り確認後に支払う仕組み：到着確認後に支払われることで詐欺のリスクが減る。④運営会社への信頼：問題があれば介入してくれるという安心感。

★ 自分の言葉へ

「確認問題と振り返りが終わりました。では最後に 30 秒。『なぜ知らない人と取引できるのか』——ケンジの言葉でもアカリの言葉でも、自分の言葉で書いてください。」

◆ 今日の持ち帰り

市場の取引は、お金だけでなく、決済・通信・契約・信頼によって成り立っている。経済の根っこは「信頼」だ。そしてその信頼は信用へ、信用は金融へとつながっている。信頼は誰かが意図的に作り、維持している仕組みの上に成り立っている。

▷ 次回へ 信頼に支えられた市場に「競争」が加わると何が起きるか——次回は競争のメリットと落とし穴を見る。

▼ 教師メモ

【ねらい】

「お金の 3 機能を覚える」より「経済の根底に信頼がある」という感覚が核心。第 2 講の「交換には信頼が必要」との接続を必ず確認する。

【信頼→信用→金融の連鎖について】

この講で「信頼→信用→金融」という連鎖に触れることで、高校での金融教育・資産形成学習への自然な橋渡しができます。「クレジットの語源は信じる」という事実だけでも、生徒が「信用」という言葉を経済の文脈で捉え直すきっかけになります。深入りする必要はありませんが、「信頼が経済の根っこである」という第 2 講のメッセージをより大きな文脈で回収する場として意識的に使ってください。

【「エスクロー」について】

「受け取り確認後に支払う仕組み」は、専門用語では「エスクロー」と呼ぶ。高校や大学で出てきたときのために、余裕があるクラスには紹介してもよい。

【観点別評価】

① 知識・技能

A：フリマアプリの事例をもとに、市場（取引）・インフラ（決済の仕組み）・制度（ルール）のそれぞれの役割を正しく理解し、事例の中の具体的な要素として指摘できる。

B：市場・インフラ・制度という言葉は知っているが、事例の中のどの部分がどれに当たるかを正しく指摘できないことがある。

C：市場・インフラ・制度の役割を理解できていない。

② 思考・判断・表現

A：評価制度・第三者機関・法制度など、信頼を支える仕組みを複数挙げながら、それらが知らない相手との取引をどう可能にしているかを筋道立てて説明できる。

B：信頼を支える仕組みを一つは挙げられるが、それが取引をどう可能にするかを筋道立てて説明することが難しい。

C：信頼を支える具体的な仕組みを挙げることができない。

③ 主体的に学習に取り組む態度

A：フリマアプリでのトラブルを自分にも起こりうることとして捉え、「なぜ仕組みが機能しなかったのか」を粘り強く考えようとしている。

B：事例への関心は持っているが、自分の問題として粘り強く考えようとする姿勢は限定的である。

C：事例を他人事として受け止め、自分から仕組みの問題を考えようとする姿勢が見られない。

【Cの生徒を引き上げるヒント】

体験活動の物々交換ゲームでお金の必要性を体感させたうえで、板書案の「お金の3つの働き」と確認問題Q1・Q4の解説を読み合わせるとよい。

【学習指導要領との対応】

公民的分野「私たちと経済」——市場の働きと価格、金融の仕組み。

第 4 講

競争はいいことか、それとも危ないか ――競争とルール――

◆ 前回から

第 3 講で「経済の根っこは信頼であり、その信頼は仕組みが支えている」ことを学んだ。今日はその市場に「競争」が加わると何が起きるかを見る。

◆ 授業の最初の 30 秒（知的な小さな衝撃）

先生は問う。「セブン・ローソン・ファミマ、3 社は激しく競争しています。では、おにぎりの値段を比べたことはありますか。」

（生徒が考える。「だいたい同じ」という答えが出る）

「そうです。激しく競争しているはずなのに、価格はほぼ横並びです。競争しているのに価格が下がらないとしたら、競争は消費者にとって本当に良いことなのでしょうか。今日はその『なぜ』を考えます。」

→そのまま物語へ。

◆ 今日の問い

企業どうしが競争すると私たちにどんな良いことがあり、なぜルールも必要なのか。そして競争の恩恵は全員に平等に届くのか。

【今日の主軸となる基盤】

A 市場	B インフラ	C 生活	D 制度
◎ 需要・価格競争・寡占	○ 地域インフラ	○ 生活アクセス	◎ 独占禁止法・ルール

📖 ケンジとアカリの物語 第 3 話 商店街の文具屋が全部なくなった

ケンジの学校の近くの商店街には、文具屋が 3 軒あった。でも 2 年前に駅の反対側に大型ショッピングモールができてから、お客さんが一気に流れた。3 軒とも 1 年以内に閉店した。

モールの文具コーナーは品揃えが豊富で、値段も商店街より安い。ケンジは自転車で 20 分かけてモールに行くようになった。「商店街より安いし、品揃えもいい。便利になった」と思っていた。

でも、あるとき気づいた。タクミが「俺、最近文具買えてない」とつぶやいていた。タクミの家には車がなく、自転車も壊れたままだ。お母さんは仕事が忙しくて送ってもらえない。商店街が近所にあったころは歩いて買えた。

アカリは言った。「モールができて便利になったのはわかる。でも便利になったのって、誰にとって？」

ケンジは思った。「競争に負けた商店街が閉まるのは仕方がない。でも何かがおかしい気がする。それは何だ」

——ケンジとアカリ、二人の問いはどこが違うか。

ケンジ：「競争の結果として何が失われたか。コンビニの横並び価格はなぜ生まれるのか」

アカリ：「便利になったのは誰で、困っているのは誰か」

グループで話し合おう

モールができて便利になったのだから仕方がない

価格は下がり品揃えは増えた。市場の競争の結果だ。でもタクミのような生徒はどうするか。「便利になった」の裏で見えなくなっているものは何か。（ケンジの問い）

便利になった人と困った人がいる

モールに行ける人には恩恵がある。でも行けない人には逆に不便になった。「競争の結果」は全員に平等に届いているか。（アカリの問い）

▶ この場面が教えてくれること

市場の競争は効率を高め価格を下げる力を持つ。しかしその恩恵は全員に平等には届かない。「安くなった・便利になった」という平均の裏に「取り残された人」がいる。これが競争だけでは解決できない問題であり、ルールや制度が必要になる理由の一つだ。

◎ 別の切り口（クラスの実態に合わせて入れ替え可）

【より身近な切り口】「近所のスーパーがなくなって遠くのモールだけになったら、誰が一番困るか——買い物難民問題を考えよう」

【より深い切り口】「巨大 IT 企業がアプリ市場を独占する問題——便利になった人と取り残された人は誰か」

【授業の流れ】

ステップ 1 物語を読み、「便利になったのに何かがおかしい」を考える（12 分）

「モールができて便利になったのに、何かがおかしいとすればそれは何か」をグループで議論させる。

✦ 交通整理

「仕方がない」で止まったら「タクミはどうすればいいのか」と問い返す。「平均として便利になった」と「取り残された人がいる」という二つの事実を黒板に並べる。ケンジの問い（何が失われたか）とアカリの問い（誰が困っているか）を対比して示す。

ステップ 2 「お店ゲーム」で競争の効果と限界を体感（14 分）

複数のチームで「文具屋」を開く。お客さん役も立てる。値段・品揃え・場所の便利さを決めてお客さんに選んでもらう。最終的に 1 チームだけ残った後「モールに行けないお客さん」を登場させる。

✦ 交通整理

「モールに行けないお客さんにとってどうなったか」を問う。「競争の恩恵は全員に届いていない」という気づきを引き出す。「審判（ルール）がないとどうなるか」もあわせて問う。

ステップ 3 スポーツの例えでルールの意味を確認（10 分）

「審判のいないサッカーはどうなるか？」と問い、「ルールは競争の敵ではなく競争を守る仕組み」と板書する。

✦ 交通整理

「経済の審判は誰？」→独占禁止法・公正取引委員会を紹介する。「審判がいないと一番損をするのは誰か」というアカリの視点も加える。

ステップ 4 まとめ（4 分）

「競争は効率を高めるが、その恩恵は全員に平等には届かない。だからルールと制度が必要」と板書して締める。

✦ 交通整理

冒頭のコンビニおにぎりの話に戻り「横並びの価格は競争していないのか、別の競争をしているのか」を問いかけ「価格以外の競争（品質・サービス・利便性）もある」という気づきで締める。

✍ 板書案（最終的に黒板に残す内容）

★ 競争とルール

競争がある → 価格が下がる、品揃えが増える、サービスが良くなる

でも → 恩恵は全員に平等には届かない

競争が行き着くと → 取り残される人が生まれる

独占禁止法 = 競争を守るための「審判」

ケンジの問い：競争の結果として何が失われたか

アカリの問い：便利になったのは誰で、困っているのは誰か

→ 競争とルールは対立していない

ルールが競争を守り、取り残される人を減らす

▶ 体験活動

複数のチームで「文具屋」を開く。お客さん役も立てる。値段・品揃え・場所の便利さを決めてお客さんに選んでもらう。最終的に 1 チームだけ残った後「モールに行けないお客さん」（足が不自由・車がない・遠い）を登場させる。

追加の問い：

- ・「残った 1 店舗の前に来られないお客さんはどうなるか」
- ・「審判（ルール）がいらないとどうなるか」
- ・「価格以外で競争している例を身近で探してみよう」

確認問題（○×＋解説）

Q1 「競争があると、企業は価格を下げたりサービスを良くしたりするため、消費者にとって良いことが多い。」

→ ○ 【解説】競争があると企業はお客さんに選んでもらうために価格を下げたり品質を上げたりします。モールが商店街より安く品揃えが豊富なのも、より多くのお客さんを集めようとする競争の結果です。競争は消費者全体にとって大きなメリットをもたらします。

Q2 「競争の結果として便利になったり価格が下がったりしても、その恩恵は全員に平等に届くとは限らない。」

→ ○ 【解説】タクミのように自転車も車もなくモールに行けない生徒にとって、商店街がなくなることは「便利になった」ではなく「買い物できなくなった」を意味します。競争の恩恵は平均として大きくても、届かない人・取り残される人が必ず存在します。

Q3 「コンビニ 3 社のおにぎりの価格がほぼ同じなのは、3 社が全く競争していない証拠だ。」

→ × 【解説】価格が横並びでも、品質・品揃え・サービス・立地・ポイント制度など価格以外の面で激しく競争しています。競争には「価格競争」だけでなく「品質競争・サービス競争」もあります。価格が同じでも競争が起きていないとは言えません。

Q4 「独占禁止法は企業の自由な競争を邪魔するものであり、市場にとって有害だ。」

→ × 【解説】独占禁止法は競争の邪魔をするのではなく、競争を守るためのルールです。審判のいないサッカーでは強いチームが何をしても止められないように、ルールがないと市場では不正な競争排除が起きやすくなります。独占禁止法は「競争という仕組みを守る審判」です。

Q5 「市場の競争で取り残される人が出ても、それは個人の問題であり、ルールや制度が対応すべきことではない。」

→ × 【解説】タクミのように「行きたくても行けない」人が生まれるのは個人の問題ではなく、市場の競争が生み出す構造的な問題です。競争の恩恵が届かない人への対応は、ルールや制度（D 基盤）の重要な役割の一つです。これは第 7 講のバス廃止の問題ともつながります。

◇ 振り返りの問い

1. 競争があると消費者にとって何が良くなるか。身近な例で説明しよう。

【解答例】モールが商店街より安く品揃えが豊富なのは競争の結果。コンビニ各社の競争で ATM・コーヒーなどサービスが充実した。競争があると企業はお客さんに選んでもらうために価格やサービスを改善する。

2. 独占禁止法はなぜ必要か。「審判のいないスポーツ」に例えながら説明しよう。

【解答例】審判がいないと強いチームがルールを破っても止められず不公正になる。市場でも独占禁止法がなければ大企業が競争相手を不正に排除したり価格を操作したりできる。独占禁止法は競争という仕組みを守る審判だ。

3. 「競争の結果として便利になった社会で、取り残される人が出るのはなぜか」をケンジとアカリ両方の視点から考えよう。

【解答例】ケンジの視点：市場の競争は「平均として」効率を高めるが、アクセスできない人のコストは市場の取引に反映されない。アカリの視点：恩恵を受けられるかどうかは個人の条件（移動手段・収入・体力など）によって異なり、もともと不利な立場の人ほど取り残されやすい。どちらの視点も「競争だけでは解決できない問題がある」という同じ結論に向かう。

★ 自分の言葉へ

「確認問題と振り返りが終わりました。では最後に 30 秒。『競争はなぜ必要で、なぜルールも必要なのか』——自分の言葉で書いてください。ケンジの視点でもアカリの視点でも構いません。」

◆ 今日の持ち帰り

競争は効率を高め価格を下げる力を持つ。しかしその恩恵は全員に平等には届かない。競争を活かしながら取り残される人を減らすには、ルールと制度が必要だ。

▷ 次回へ 競争があっても消費者が必ず守られるとは限らない——次回は「情報の差」という問題を見る。

▼ 教師メモ

【ねらい】

「競争は善か悪か」の二項対立に陥らせない。競争の恩恵と限界を同時に見る複眼的な視点を育てる。

【現実の市場について】

実際の市場はコンビニのように「少数の大企業が価格以外で競争する寡占状態」がほとんどです。「1 社になったら即値上げ」という単純な図式ではなく「競争の恩恵が全員に届かない」という現実の問題を扱うことがこの講の核心です。

【需給曲線をなぜこの講で使わないか】

需給曲線が成立するためには完全競争・情報の完全性・外部性なし・財の均質性など、現実にはほぼ成立しない前提条件が必要です。今日の物語で扱った「商店街全滅・モール一択」という現実、これらの前提条件がほぼ全て成立していません。前提条件を説明せずに需給曲線を「経済の基本法則」として教えることは、生徒に経済への歪んだ直観を植え付けます。このプログラムは需給曲線を「後から補助ツールとして使う」立場をとっています。

【受験対応が必要な先生へ：需給曲線の最小限の教え方】

高校入試・定期テストで需給曲線が出題される場合は、以下の手順で扱うことを推奨します。

- ・ 今日の物語と接続する：「文具屋が 3 軒あったころ、価格はどうか決まっていたか」から導入
- ・ グラフは「地図」として使う：「需要が増えると価格は上がりやすい」という方向性を理解する道具として位置づける
- ・ 前提条件を一言で添える：「ただしこのグラフが成立するのは買い手も売り手もたくさんいて自由に競争できる場合の話です」という一言を必ず添える

【第 7 講への伏線】

「モールに行けないタクミ」の問題は、第 7 講のバス廃止の問題と同じ構造。「採算・効率 vs 誰でも使えること・公正」というトレードオフへの伏線として意識的に扱う。

【観点別評価】

① 知識・技能

A：競争が価格や質を改善する仕組みであることと、独占禁止法などのルールが必要となる理由を、それぞれ正しく理解し説明できる。

B：競争や独占禁止法という言葉は知っているが、両者の関係を正しく理解して説明することが難しい。

C：競争の仕組みやルールの必要性を理解できていない。

② 思考・判断・表現

A：文具店やモールの事例をもとに、競争の恩恵から取り残される立場があることを踏まえ、制度（ルール・支え合い）がなぜ必要かを理由とともに説明できる。

B：競争に限界があることは説明できるが、制度の必要性を理由とともに説明することが難しい。

C：競争を「良いこと」または「悪いこと」のどちらか一方としてしか捉えられない。

③ 主体的に学習に取り組む態度

A：身近な商店やお店の競争について、恩恵を受ける人と取り残される人の両方の立場から粘り強く考えようとしている。

B：競争のメリットには関心を持つが、取り残される立場について考えようとする姿勢は限定的である。

C：競争の結果を「仕方がない」で片づけ、自分から多様な立場を考えようとしていない。

【Cの生徒を引き上げるヒント】

体験活動のお店ゲームで「モールに行けないお客さん」を実際に体験させ、確認問題 Q2・Q5 の解説を使って恩恵が届かない人の存在を具体的に言語化させる。

【学習指導要領との対応】

公民的分野「私たちと経済」——市場の働きと価格、消費者の権利、対立と合意・効率と公正。

第 5 講

見えない差が、社会を動かしている ――情報の差と信頼・信用――

◆ 前回から

第 4 講で「競争は効率を高めるが、その恩恵は全員に平等には届かない」ことを学んだ。今日はもう一つの見えない構造――「情報の差」を見る。これは市場だけでなく、私たちの日常のあらゆる場面に潜んでいる。

◆ 授業の最初の 30 秒（知的な小さな衝撃）

先生は問う。「友達があなたに『絶対おもしろいから』と映画を勧めてきた。あなたはその映画を見ていない。友達は見ている。このとき、二人の間にある『差』は何でしょう。」

（生徒が考える。「情報の差」が出てくる）

「では、なぜあなたはその友達を信じてチケットを買えるのか。今日はその『なぜ』を考えます。」

→そのまま物語へ。

◆ 今日の問い

私たちの周りには「相手の方が情報を持っている」場面があふれている。それでも社会が成り立つのはなぜか。そしてその答えである「信頼」は、経済社会全体をどのように支えているのか。

【今日の主軸となる基盤】

A 市場	B インフラ	C 生活	D 制度
◎ 取引・消費者の選択	○ デジタル市場	◎ 人間関係・信頼	◎ 情報の差・消費者保護

📖 ケンジとアカリの物語 第 4 話 見えない差の中で、私たちは生きている

ケンジが帰宅すると、お母さんが暗い顔でスマホを見ていた。「健康食品を無料お試しで申し込んだら、2 か月目から毎月 5,000 円引き落とされてた」と言う。申し込み画面の隅に小さな文字で「定期購入の解約は 30 日前までに連絡」と書いてあったが、気づかなかった。

翌日アカリにこの話をした。アカリは「うちのお母さんも同じことあった」と言ってから、こんなことを話してくれた。

「でもさ、考えてみたら、情報の差ってどこにでもあるよね。お医者さんは病気のことを私より知ってる。先生は教科書の内容を私より知ってる。中古車の売り手は車の傷を買い手より知ってる。私たちって、いつも誰かの方が情報を持っている状況の中で生きてるんじゃないかな」

ケンジはしばらく考えた。「じゃあなんで俺たち、お医者さんを信じて薬を飲めるんだろう。先生の話信じて勉強できるんだろう。知らない出品者からフリマで買えるんだろう」

アカリが言った。「信じるしかないから、じゃなくて……信じられる理由が何かあるから、じゃないかな」
——二人が気づいたこと

ケンジ：「情報の差があるのに取引や関係が成り立つのはなぜか」

アカリ：「情報の差が悪用されるときと、されないときの違いは何か」

グループで話し合おう

情報の差は「だます側が悪い」という問題だ

小さな文字で隠した会社は明らかに問題だ。でも医者・先生・整備士も「情報の差」がある立場にいる。なぜ同じ「情報の差」があるのに、信頼できる場合とできない場合があるのか。（ケンジの問い）

信頼できる理由が何かあるはずだ

医者を信じられるのはなぜか。免許・資格・評判・繰り返しの関係……何が「信じられる理由」を作っているのか。それが壊れるとどうなるか。（アカリの問い）

▶ この場面が教えてくれること

情報の差は市場取引だけでなく、医療・教育・人間関係など社会のあらゆる場面に存在する普遍的な構造だ。それでも社会が機能するのは「信頼」があるからだ。しかしその信頼は自然に生まれるのではなく、資格・免許・評判・制度・繰り返しの関係という仕組みによって作られている。消費者保護はその仕組みの一つに過ぎない。信頼は信用へ、信用は金融へとつながる。

◎ 別の切り口

【より身近な切り口】「友達に『おいしいから食べてみて』と言われたものを食べるとき、あなたは何を信じているか」

【より深い切り口】「医療情報・ニュース・SNS の情報——情報の差がデジタル社会でどう変化しているか」

【授業の流れ】

ステップ 1 物語を読み、「情報の差はどこにでもある」ことに気づく（10 分）

「情報の差がある場面を身近なところからできるだけ多く探そう」とノートに書かせる。

✦ 交通整理

「お医者さん・先生・整備士・不動産屋・フリマの出品者……」と多様な場面が出てくる。「これは全部同じ構造だ」と板書する。「では信頼できる場合とできない場合の違いは何か」を次のステップへの問いとして残す。

ステップ 2 「信頼できる理由」を探す（14 分）

「医者信じて薬を飲むのはなぜか」「フリマで知らない人から買えるのはなぜか」をグループで考えさせる。

✦ 交通整理

「免許・資格・評判・口コミ・繰り返しの関係・制度・法律」などが出てくる。これらを「信頼を作る仕組み」として板書に整理する。第 3 講「フリマの評価システム・補償制度」と接続させる。「これらがなかったらどうなるか」を問い、「社会が機能しなくなる」という気づきへ。

ステップ 3 「信頼が壊れるとき」と「信頼→信用→金融」（10 分）

「食品偽装・医療詐欺・ステマ（ステルスマーケティング）——これらは何を壊しているか」と問う。さらに「信頼」から「信用」へ、「信用」から「金融」への連鎖を説明する。

✦ 交通整理

消費者保護の制度をここで紹介する。「クレジットの語源は『信じる』』という一言で信用と金融のつながりを板書に加える。188 番をここで紹介する。

ステップ 4 まとめ（6 分）

「情報の差は普遍的な構造→信頼がなければ社会は機能しない→信頼は仕組みによって作られる→信頼→信用→金融→消費者保護はその一つ」と板書して締める。

✦ 交通整理

第 3 講「経済の根っこは信頼」に戻り「あのときの信頼が、今日でさらに深まった」という流れを確認する。

✍ 板書案

★ 情報の差と信頼・信用

情報の差：相手の方が情報を持っている状態

→ 市場・医療・教育・人間関係……どこにでもある

→ 悪用されると取引・関係が成り立たなくなる

それでも社会が機能するのは「信頼」があるから

信頼を作る仕組み：

免許・資格 / 評判・口コミ / 繰り返しの関係

制度・法律 / 消費者保護

信頼 → 信用（経済的な裏付けのある評価）

信用 → 金融（お金を貸し借りする仕組み）

クレジット = 「信じる」が語源

困ったら → 188（消費生活センター）

▶ 体験活動：信頼できる理由カード

グループで「医者・中古車販売員・フリマ出品者・友達・先生」の5人について「なぜ信頼できるか（または信頼できないか）」をカードに書き出す。「信頼を作っているもの」を分類して黒板に貼る。

追加の問い：

- ・「その信頼が壊れるのはどんなときか」
- ・「信頼がなくなったら、その取引・関係はどうなるか」

確認問題（○×＋解説）

Q1 「情報の差とは市場取引だけに起きる特殊な問題であり、日常の人間関係には関係がない。」

→ × 【解説】情報の差は市場取引だけでなく、医療（医者は病気を患者より知っている）・教育（先生は内容を生徒より知っている）・人間関係など、社会のあらゆる場面に存在する普遍的な構造です。

Q2 「医者を信じて薬を飲むのは、免許・資格・評判など『信頼を作る仕組み』があるからだ。」

→ ○ 【解説】医者には国家資格があり、医療行為には法律上の規制があり、評判・口コミという繰り返しの関係もあります。これらが「信頼できる理由」を作っています。信頼は自然に生まれるのではなく、こうした仕組みによって作られています。

Q3 「情報の差がある状況では、情報を多く持つ側が必ず相手をだますため、取引や関係は成り立たない。」

→ × 【解説】情報の差があっても、信頼の仕組みがあれば取引・関係は成り立ちます。医者・先生・整備士など、情報の差がある立場でも信頼されているのは、免許・資格・評判・制度という仕組みがあるからです。情報の差があること自体が問題なのではなく、信頼の仕組みが機能しないことが問題です。

Q4 「食品偽装やステルスマーケティング（ステマ）が問題なのは、それが情報の差を悪用して信頼を壊す行為だからだ。」

→ ○ 【解説】食品偽装は「生産者は産地・成分を知っている、消費者は知らない」という情報の差を悪用します。ステマは「広告主と発信者が知っていて消費者が知らない」という情報の差を利用します。どちらも信頼の仕組みを意図的に壊す行為であり、市場全体への信頼を損なわせます。

Q5 「消費者保護の制度は、情報の差による被害を防ぐ唯一の方法であり、制度がなければ信頼は生まれにくい。」

→ × 【解説】消費者保護は信頼を守る仕組みの一つですが、唯一の方法ではありません。評判・口コミ・繰り返しの関係・資格・規範など、制度以外にも信頼を作る仕組みはたくさんあります。困ったときは 188 番（消費生活センター）に相談しましょう。

◇ 振り返りの問い

1. 「情報の差」とはということか。医療と中古車売買の二つの例で説明しよう。

【解答例】医療：医者は病気の原因・治療法を患者より詳しく知っている。患者は医者の判断を信じるしかない状況がある。中古車：売り手は車の傷・修理歴・不具合を知っている。買い手は見た目と説明しかわからない。どちらも「相手の方が情報を持っている」という同じ構造だ。

2. 情報の差があっても社会が機能するのはなぜか。「信頼を作る仕組み」を三つ以上挙げて説明しよう。

【解答例】①免許・資格：医者・弁護士などは国家資格で一定の水準が保証されている。②評判・口コミ：過去の行動が見えることで相手の信頼度がわかる。③繰り返しの関係：何度も取引することで信頼が積み上がる。④制度・法律：消費者保護法などが悪用を防ぐ。これらが重なって「信じられる理由」が作られる。

3. 「信頼→信用→金融」という連鎖はどういう意味か。クレジットカードを例に説明しよう。

【解答例】信頼は「この人は約束を守る」という社会的な評価。信用は「この人はお金を返せる」という経済的な評価。金融は「信用を売り買いする仕組み」。クレジットカードの「クレジット」はラテン語の「信じる」が語源で、カード会社が利用者の信用を評価して後払いを認める仕組みだ。信頼なしに金融は成り立たない。

★ 自分の言葉へ

「確認問題と振り返りが終わりました。では最後に 30 秒。今日学んだことの核心を——自分の言葉で書いてください。ケンジの視点でもアカリの視点でも構いません。」

◆ 今日の持ち帰り

情報の差は社会のあらゆる場面に存在する普遍的な構造だ。それでも社会が機能するのは、免許・評判・制度・繰り返しの関係という「信頼を作る仕組み」があるからだ。そして信頼は信用へ、信用は金融へとつながっている。

▷ 次回へ 情報の差・力の差は、働く場面にも存在する——次回は「働く側」にも同じような力の差がある問題を見る。

▼ 教師メモ

【ねらい】

「消費者保護の制度を知ろう」という実用的な話を超え、「情報の差は社会の普遍的な構造であり、信頼という仕組みがそれを支えている」という経済社会の根本的な理解を目指す。

【第 3 講との接続】

第 3 講「経済の根っこは信頼」で植えた種を、この講で大きく育てる。「あのときフリマの話で出てきた信頼が、実は社会全体を支えている」という気づきへ。

【アカロフの『レモンの市場』について】

情報の差が市場を崩壊させる仕組みを体系化したジョージ・アカロフの理論（1970 年）はノーベル経済学賞を受賞しています。中学生には「中古車の売買」という同じ例で説明できます。余裕があるクラスには「なぜ中古車は新車より極端に値段が下がるのか」という問いとして紹介してもよいでしょう。

【観点別評価】

① 知識・技能

A：口コミ・評価制度・法律による表示義務・第三者機関など、信頼を作る仕組みの種類とその役割を正しく理解している。

B：信頼を作る仕組みの名称は知っているが、それぞれの役割を正しく理解して説明することが難しい。

C：信頼を作る仕組みを理解できていない。

② 思考・判断・表現

A：市場だけでなく進路選択や人間関係など様々な場面に情報の差があることを踏まえ、信頼→信用→金融という連鎖を自分の言葉で順序立てて説明できる。

B：情報の差や信頼・信用・金融の関連には気づいているが、順序立てて説明することが難しい。

C：情報の差を教材の事例に限定されたこととして捉え、他の場面と結びつけて考えられない。

③ 主体的に学習に取り組む態度

A：自分の身の回りにある「情報の差」がある場面（買い物・進路選択など）を自ら探し、信頼をどう築けばよいかを考えようとしている。

B：教材の事例には関心を持つが、自分の身の回りの場面に広げて考えようとする姿勢は限定的である。

C：情報の差を自分とは関係のない出来事として受け止めている。

【C の生徒を引き上げるヒント】

【よりやさしい切り口】で身近な「情報の差」の場면을挙げさせ、板書案の「信頼を作る仕組み」一覧で分類させる。確認問題 Q2 の解説を模範文として使うとよい。

【学習指導要領との対応】

公民的分野「私たちと経済」——消費者の権利と保護、市場の働き。

第 6 講

「来月から来なくていい」と LINE が来た ――労働と生活――

◆ 前回から

第 5 講で「情報の差は社会のあらゆる場面にある。それでも社会が機能するのは信頼の仕組みがあるから」を学んだ。今日は別の「差」――力の差を見る。働く人と雇う人の間にも、消費者と企業の間と同じ構造がある。

◆ 授業の最初の 30 秒（知的な小さな衝撃）

先生は問う。「アルバイトの面接で『うちは残業代は出ないけどいい？』と言われたら、あなたはどうしますか。」

（生徒が考える。「断れない」「仕方ない」という声が出る）

「では、なぜ断りにくいのでしょうか。そしてそれは法律上、本当に『仕方ない』ことなのでしょうか。」

→そのまま物語へ。

◆ 今日の問い

働くことはお金を稼ぐだけなのか。労働と私たちの生活はどうつながっているのか。そして働く人と雇う人の間にある「力の差」は、なぜ問題なのか。権利は誰が作ったのか。

【今日の主軸となる基盤】

A 市場	B インフラ	C 生活	D 制度
◎ 労働市場・賃金・雇用	—	◎ 教育・キャリア・生活設計	◎ 労働法制・雇用保障

📖 ケンジとアカリの物語 第 5 話 「来月から来なくていい」と LINE が来た

おばあちゃんの友達の田村さん（68 歳）は、近所のスーパーでパートをしていた。毎月の収入は生活費の一部だった。先週、店長から LINE が来た。「売上が落ちたので、来月からシフトを 0 にします。来なくていいです」。事前の説明は一切なかった。

田村さんは「バイトやパートはこんなもの。仕方がない」と話している。おばあちゃんは「そんな話があるか」と怒っている。

アカリはこの話を聞いて、すぐに別のことを思い出した。「うちのお母さんも似たようなことあったよ。パートだからって、急にシフトを半分に減らされて。文句言えない雰囲気で……でも本当に仕方がないの？」

ケンジは思った。「労働って、普通の売り買いと何が違うんだろう。田村さんは自分の時間と体力を売って、スーパーはそれを買っていた。でもスーパーは突然『要らない』と言える。田村さんは突然『要る』とは言えない。この差はなんだ」

アカリが言った。「これって第 5 講で出てきた『力の差』と同じじゃない。情報の差じゃなくて、今度は力の差。どちらも弱い側が損をしやすい構造だよ」

おばあちゃんが言った。「昔はね、こういとき労働組合が動いてくれたんだよ。みんなで声を合わせれば、一人では言えないことも言えた」

アカリは初めてその言葉をちゃんと聞いた気がした。「一人では声を上げにくくても、みんなで集まれば違うってこと？」

ケンジは思った。「労働基準法って、誰かが作ってくれたルールだ。でもそのルール、最初からあったわけじゃないよな。誰かが声を上げて、勝ち取ってきたものなんじゃないか」

——ケンジとアカリ、二人の問いはどこが違うか。

ケンジ：「なぜ労働に特別なルールが必要なのか。そのルールはどうやって生まれたのか」

アカリ：「力の差がある中で、声を上げられない人はどう守られるのか」

グループで話し合おう

パートだから仕方がない

アルバイトやパートは「弱い立場」だ。でも突然のシフトゼロ・賃金未払いは法律上どうなのか。「パートだから何でもいい」は本当か。（ケンジの問い）

力の差がある中で声を上げるのは難しい

「文句を言ったら次から呼ばれなくなる」という恐れは現実だ。一人では声を上げにくくても、みんなで集まれば力になる——これが労働組合の原点だ。（アカリの問い）

▶ この場面が教えてくれること

労働は「時間と体力を提供してお金をもらう取引」だが、働く人の生活・尊厳が直結しているため普通の商品と同じルールでは守れない。だから労働基準法というルールがある。そして今ある権利は「最初からあったもの」ではなく「声を上げて勝ち取ったもの」だ。

◎ 別の切り口

【より身近な切り口】「バイト先から急に『熱があっても来て、来なければ給料を引く』と言われた——これは法律上 OK か」

【より深い切り口】①「同じ仕事をしているのに、なぜ正社員とパートで給料が違うのか——同一労働同一賃金という考え方」

②なぜ 68 歳で働いているのか。そのような年齢で働く高齢者の生活はどうなっているか？

③若いパートの人が、AI が入ったから止めて欲しいという LINE が入った。ケンジやアカリが働くようになったときに、どのような労働環境になっているだろうか？

【授業の流れ】

ステップ 1 物語を読み、「田村さんは何も言えないのか」を議論する（12 分）

「田村さんは何もできないのか、できることはあるのか」をグループで議論させる。

✦ 交通整理

「バイトだから仕方ない」で止まったら「アルバイトも契約だ。契約が破られたらどうなるか」と問い返す。ケンジの問い（労働は普通の取引と何が違うか）とアカリの問い（声を上げられない人はどうすればよいか）を黒板に並べる。第 5 講「消費者の力の差」と同じ構造だと気づかせる。

ステップ 2 「ブラックバイト発見ゲーム」で労基法を体感（14 分）

「おかしい労働条件カード」（時給 700 円・サービス残業・突然解雇・制服代天引き等）を提示する。「これは法律上 OK か、NG か」をグループで考える。労働基準法の主なルールと照らし合わせて答え合わせをする。

✦ 交通整理

「知らないで損する」という実感が持てれば成功。第 5 講「消費者保護を知らないで損する」と今日「労働基準法を知らないで損する」という構造の共通点を確認する。

ステップ 3 「なぜ労働には特別なルールが必要か」と労働組合の歴史（10 分）

「なぜ労働には特別なルールが必要か」→「働く人の生活・尊厳が直結しているから」「力の差があるから」。さらに「今ある権利はどうやって生まれたか」を問う。

✦ 交通整理

「労働基準法（1947 年）・労働組合法（1945 年）は、労働者たちが声を上げて勝ち取ってきたものだ」と板書する。「権利は与えられるものではなく、勝ち取るものでもある」というメッセージを丁寧に伝える。

ステップ 4 まとめ（4 分）

「力の差→労働基準法（与えられた保護）」と「声を上げて→労働組合法（勝ち取った権利）」を板書に並べて締める。

✦ 交通整理

「労働基準監督署に相談できる」ことを全員がノートにメモする。

✎ 板書案

★ 労働と力の差

労働 = 市場の取引 (A 基盤)

でも「人の生活・尊厳」が直結している → 普通の商品と違う

力の差：企業（買い手）＞ 労働者（売り手）

力の差への二つの対応：

①与えられた保護 → 労働基準法（1947 年）

最低賃金 / 労働時間上限 / 突然解雇禁止 / 賃金未払い違法

②勝ち取った権利 → 労働組合法（1945 年）

団結権・団体交渉権・争議権

「一人では言えないことも、みんなで言える」

権利は最初からあったのではなく

声を上げて勝ち取られてきたものだ

困ったら → 労働基準監督署に相談

▶ 体験活動：ブラックバイト発見ゲーム

「おかしい労働条件カード」を提示し、「これは法律上 OK か、NG か」をグループで考える。

労働条件	判定
時給 650 円（最低賃金以下）	× 最低賃金法違反
サービス残業（残業代なし）	× 労働基準法違反
LINE で突然「明日から来なくていい」	× 解雇予告手当が必要
制服代・研修費を給料から天引き	× 原則として違法
有給休暇の取得を断られた	× 6 か月勤務後は権利あり
熱があっても出勤を強要された	× 安全配慮義務違反

確認問題（○×＋解説）

Q1 「労働者が団結して使用者（企業）と交渉したり、ストライキをしたりする権利は、法律で保障されていない。」

→ × 【解説】労働組合法（1945 年）は労働者の団結権・団体交渉権・争議権（ストライキなどの団体行動をする権利）を保障しています。これを「労働三権」と呼びます。一人では声を上げにくくても、労働組合として団結することで使用者と対等に交渉できる仕組みです。この権利は労働者たちが歴史的に声を上げて勝ち取ってきたものです。

Q2 「労働が普通の商品の売り買いと根本的に違うのは、働く人の生活・尊厳が直結しているからだ。」

→ ○ 【解説】野菜や文具は「売れなければ別の売り方を探せる」ですが、労働力は働く人そのものです。突然解雇されれば生活が直撃します。だからこそ最低賃金・労働時間の上限・解雇規制など、普通の商品取引にはない特別なルールが必要です。

Q3 「企業と労働者は対等な立場で労働契約を結ぶため、力の差はなく、特別なルールは必要ない。」

→ × 【解説】現実には企業（買い手）と労働者（売り手）の間には大きな力の差があります。特に雇用が少ない地域・非正規雇用・若年労働者ほど力の差が大きい。だから労働基準法という「審判」が必要です。

Q4 「アルバイトやパートも労働基準法の保護を受けられるため、突然解雇には原則として 30 日間の予告が必要だ。」

→ ○ 【解説】労働基準法はアルバイト・パートにも適用されます。突然の解雇には原則として 30 日間の予告か 30 日分の解雇予告手当が必要です。「パートだから何でもいい」は法律上誤りです。

Q5 「労働基準法と労働組合法はどちらも労働者を守るためにあるが、前者は『与えられた保護』、後者は労働者が自ら『勝ち取った権利』を保障するものとして性格が異なる。」

→ ○ 【解説】労働基準法は国が「最低限これは守れ」と企業に義務づける「与えられた保護」。労働組合法は労働者が自ら団結して交渉・行動する「勝ち取った権利」を保障するもの。前者は個人を守る最低限の盾、後者は集団で力をつけるための仕組みです。

◇ 振り返りの問い

1. 「時給 1,000 円のアルバイト」を市場の取引として見ると、何を売り、何を買っているのか。なぜ普通の商品取引と違うルールが必要か。

【解答例】働く側（売り手）：自分の時間・体力・能力を提供する。企業（買い手）：その労働力を時給 1,000 円で購入する。しかし労働は「人間の時間と体・生活」そのものであるため、最低賃金・労働時間の法的保護が必要。野菜の値段が下がっても農家の命には関わらないが、賃金が下がれば労働者の生活が直撃する。

2. 第 5 講（情報の差→消費者保護）と第 6 講（力の差→労働基準法）に共通する構造は何か。

【解答例】どちらも「力の弱い側（消費者・労働者）」と「力の強い側（企業）」の間に差がある。力の差があるまま放置すると弱い側が一方的に損をしやすい。その差を補うために制度（D 基盤）が必要という構造が共通している。

3. 「労働基準法と労働組合法はどう違うか」を「与えられた保護」と「勝ち取った権利」という言葉を使って説明しよう。

【解答例】労働基準法は国が「最低限これは守れ」と企業に義務づける「与えられた保護」。労働組合法は労働者が自ら団結して交渉・行動する「勝ち取った権利」を保障するもの。前者は個人を守る最低限の盾、後者は集団で力をつけるための仕組みで、どちらも力の差がある中で弱い側を守るという目的は同じだが、主体が「国」か「労働者自身」かという点で異なる。

★ 自分の言葉へ

「確認問題と振り返りが終わりました。では最後に 30 秒。今日学んだことの核心を——自分の言葉で書いてください。ケンジの視点でもアカリの視点でも構いません。」

◆ 今日の持ち帰り

労働は市場の取引だが、働く人の生活・尊厳が直結しているため法律による保護が必要だ。今ある権利は「最初からあったもの」ではなく「声を上げて勝ち取ったもの」だ。

▷ 次回へ ここまで市場の中の問題を見てきた。次回からは「市場そのものが届かない領域」——採算が取れなくても必要なサービスを見る。

▼ 教師メモ

【ねらい】

「労働基準法の条文を覚える」ではなく「力の差がある場所には制度が必要、そして権利は勝ち取るものでもある」という構造的・歴史的理解を目指す。

【ケンジとアカリの使い方】

この講ではアカリの家庭設定（母子家庭・パート勤めのお母さん）が自然に生きる。ただしアカリの家庭に過度に注目せず「こういう立場の人がいる」という気づきに留める。

【労働組合の現代的課題】

近年、労働組合の組織率は低下しています（2023 年時点で約 16%）。特に非正規労働者・若年労働者の組合加入率は低い。「なぜ労働組合が必要とされなくなったのか」は現代日本の労働問題の核心の一つです。深入りする必要はありませんが、生徒が「労働組合は古いもの」と感じている場合は「なぜそう感じるのか」を問い返すことが有効です。

【観点別評価】

① 知識・技能

A：労働基準法（労働条件の最低基準）と労働組合法（団結して交渉する権利）の役割の違いを正しく理解し、区別して説明できる。

B：二つの法律の名前は知っているが、それぞれの役割の違いを正しく理解して説明することが難しい。

C：労働に関する法律の役割を理解できていない。

② 思考・判断・表現

A：情報の差（第5講）と労働における力の差（第6講）に共通する「力の強い側と弱い側の差を制度で補う」という構造を見だし、自分の言葉で説明できる。

B：両方の講に似た問題があることには気づいているが、共通する構造を言葉にして説明することが難しい。

C：第5講の内容と結びつけて考えることができない。

③ 主体的に学習に取り組む態度

A：「来月から来なくていい」という事例を自分の将来の働き方と結びつけ、労働環境の変化や自分のキャリアについて自分の言葉で考えようとしている。

B：事例の内容には関心を持つが、自分自身の将来と結びつけて考えようとする姿勢は限定的である。

C：労働環境の変化を自分とは関係のない一般的な知識として捉えている。

【Cの生徒を引き上げるヒント】

体験活動（ブラックバイト発見ゲーム）の判定表を使い、板書案の「与えられた保護」「勝ち取った権利」という対比で労働基準法と労働組合法を整理させる。

【学習指導要領との対応】

公民的分野「私たちと経済」——労働の意義、労働者の権利、労働環境の変化。

第 7 講

ケンジの町のバスが、なくなる ――採算が取れなくても必要なものがある――

◆ 前回から

第 6 講まで「市場の中の力の差・情報の差」を見てきた。今日からは視点を変える。「市場そのものが届かない領域」――採算が取れなくても社会に必要なサービスとは何か。そしてそれを誰がどう支えるべきかを考える。

◆ 授業の最初の 30 秒（知的な小さな衝撃）

先生は問う。「日本郵便は離島にも本州と同じ料金で手紙を届けます。離島への配送は明らかに赤字です。なぜそれでも同じ料金で届けるのでしょうか。」

（生徒が考える。「法律で決まっている」「公平だから」などが出る）

「では、採算が取れないサービスを社会が支えるべき理由とは何でしょうか。今日はその問いを考えます。」

→そのまま物語へ。

◆ 今日の問い

採算が取れなくても社会に必要なサービスがあるのはなぜか。そしてそれをどう支えるべきかを、「効率」と「公正」という二つの物差しで考えよう。

【今日の主軸となる基盤】

A 市場	B インフラ	C 生活	D 制度
◎ 採算・市場の限界	◎ 地域交通・公益サービス	◎ 地域生活・医療アクセス	◎ 効率と公正・補助・制度

📖 ケンジとアカリの物語 第 6 話 バス廃止の貼り紙

月曜の朝、学校のバス停に貼り紙が出ていた。「来年度より、このバス路線を廃止いたします。乗客が少なく、赤字が続いているためです」

ケンジの学校まで 5km 以上ある生徒は 20 人いる。自転車も乗れない子、親が送迎できない子もいる。タクミがケンジに言った。「俺んち、バスがなくなったら学校来られないかもしれん」

アカリはすぐに思った。「第 4 講のモールの話と同じだ。便利になった人と取り残された人がいる。今度は『採算が取れない』という理由で、タクミみたいな子を取り残される」

ケンジはバス会社の説明を読んだ。「採算が取れないから廃止」——その論理はわかる。でもどこかおかしい気がした。「コンビニが赤字なら閉めるのは当然だ。でも学校に行くバスが赤字なら廃止していいのか。この二つは同じなのか、違うのか」

アカリが言った。「採算っていうのは『お金になるかどうか』の物差しだよ。でも社会には、お金にならなくても必要なものがあるんじゃないかな。その物差しを何と呼べばいいんだろう」

——ケンジとアカリ、二人の問いはどこが違うか。

ケンジ：「採算が取れないサービスを廃止するのは当然なのか。コンビニと学校バスの違いは何か」

アカリ：「採算という物差しだけでは見えないものがある。もう一つの物差しとは何か」

グループで話し合おう

バス廃止は仕方がない

会社の赤字は本物だ。税金で赤字を補い続けることには限界がある。でもタクミのような生徒はどうするか。「採算が取れないから廃止」はどこまで通用するのか。（ケンジの問い）

採算だけが物差しではない

学校に通えない生徒が出ることは、社会としてどう考えるべきか。「誰でも使えること」という物差しを「公正」と呼ぶなら、効率と公正はどちらが大切か。（アカリの問い）

▶ この場面が教えてくれること

「採算（効率）」と「誰でも使えること（公正）」は別の物差しだ。市場は採算という物差しで動く。しかし社会には、採算が取れなくても公正の観点から維持すべきサービスがある。どちらをどこまで優先するかは、社会全体の判断であり、簡単に「どちらが正しい」とは言えない。

◎ 別の切り口

【より身近な切り口】①「山間部の小学校が費用対効果が低いとして統廃合される——採算と公正を考えよう」

②学校給食の自校調理を給食センターに一元化する

【より深い切り口】「離島への定期船が年間赤字 3,000 万円——廃止か税金で維持か。ユニバーサルサービスとは何か」

【授業の流れ】

ステップ 1 物語を読み、「コンビニと学校バスの違いは何か」を考える（8 分）

「コンビニが赤字なら閉店するのは当然。では学校へ行くバスが赤字なら廃止していいか？」と問う。

✦ 交通整理

「違う」という声が出る→「なぜ違うのか？」を考えさせる。「子どもの権利」「教育を受ける権利」が出ればなお良い。ケンジの問い（二つの違いは何か）を板書する。アカリの問い（採算以外の物差しとは何か）を隣に並べる。

ステップ 2 「存続会議」体験活動（18 分）

立場カードを引いて役割を決め（通学できなくなる生徒・バス会社・市役所担当者・税金を払っている市民・おじいちゃんおばあちゃん）、「バスを続けるべきか、やめるべきか」を議論させる。

✦ 交通整理

各立場の意見が出揃ったら「全員が納得できる落とし所はあるか？」と問う。「ない」という結論も重要な気づきだ。「コミュニティバス・デマンドタクシーなど折衷案」も考えさせる。

ステップ 3 「効率と公正」のトレードオフを整理する（10 分）

「採算（効率）」と「誰でも使えること（公正）」の 2 軸を板書。「この 2 つは両立できるか？」を全体で議論する。

✦ 交通整理

「どちらも大切」で終わらせず「どこで線を引くかが社会の判断」という言葉に着地させる。「その判断を誰がするのか」→「私たち市民・有権者が決める」という主権者教育への接続も意識する。

ステップ 4 まとめ（4 分）

「市場だけでは維持できないサービスを制度で支える必要がある。その判断の基準が効率と公正のバランスだ」と板書して締める。

✦ 交通整理

冒頭の日本郵便の話に戻り「なぜ離島にも同じ料金で届けるのか——それが『ユニバーサルサービス』という考え方だ」と接続して締める。

✍ 板書案

★ 効率と公正

効率（採算）：コストに見合うか → 市場の物差し

公正（誰でも使えるか）：どこに住んでいても

同じサービスを受けられるか → 社会の物差し
コンビニが赤字 → 閉店は当然（市場の論理）
学校バスが赤字 → 廃止していいか？（社会の判断）
→ 教育を受ける権利・移動の権利
ユニバーサルサービス：どこに住んでいても
一定のサービスを受けられる仕組み
どこで線を引くか = 社会の判断
→ 私たち市民・有権者が決める

🔍 探究課題：あなたの地域の「採算と公正」を調べてみよう

この授業で考えたことは、教室の外で今まさに起きている問題です。日本全国でバス路線・鉄道路線・公共施設の廃止・縮小が相次いでいます。積雪地帯では交通廃止が生死に関わる問題になることもあります。都市部でも深夜バスの廃止・路線の集約が進んでいます。

◆ 探究のテーマ例

- ・ バス路線の廃止・縮小：どの路線がいつ廃止されたか。誰が困ったか。その後どうなったか。
- ・ 鉄道路線の廃止：廃止までの経緯。地域住民の反応。代替交通手段はあったか。
- ・ 公共施設の統廃合：図書館・学校・病院の統廃合。採算以外の判断基準はあったか。
- ・ 合意形成の過程：廃止・存続をめぐる誰がどのように話し合ったか。住民の声はどう反映されたか。

◆ 先生へのメモ

積雪地帯の先生へ：地域の具体的な路線廃止の事例を物語の「バス廃止」と重ねて紹介することで、生徒が「これは教科書の話ではなく自分たちの問題だ」と実感しやすくなります。

都市部の先生へ：「車を持たない高校生・高齢者・障害のある人にとってどうか」という視点で身近な事例を探すと見つかりやすいです。

フューチャーデザインの視点：「30年後の自分たちが受け継ぐ社会」という視点で考えさせることも有効です。

確認問題（○×＋解説）

Q1 「採算が取れないサービスは市場の原理に従って廃止するべきであり、税金で支える必要はない。」

→ × 【解説】採算（効率）は市場の物差しですが、社会にはそれだけでは測れない「公正」という物差しもあります。学校への通学路・過疎地の医療・離島への郵便など、採算が取れなくても社会全体として維持すべき

サービスがあります。どこまで税金で支えるかは社会の判断ですが「採算が取れないから全て廃止」は公正の観点から問題があります。

Q2 「ユニバーサルサービスとは、どこに住んでいても一定の生活サービスを受けられるようにするという考え方だ。」

→ ○ 【解説】日本郵便が離島にも同じ料金で手紙を届けるのはユニバーサルサービスの考え方に基づいています。採算が取れなくても社会全体として維持すべきサービスを、制度や補助で支える仕組みです。通学バス・過疎地の医療・水道なども同じ考え方で支えられています。

Q3 「効率（採算）と公正（誰でも使えること）は同じ意味であり、採算が取れるサービスは自動的に公正なサービスだ。」

→ × 【解説】効率と公正は別の物差しです。採算が取れるサービスが全員に届くとは限りません。第4講のモールの例でも、採算が取れるモールに行けない人がいました。採算（効率）は「お金になるか」を測り、公正は「誰でも使えるか」を測ります。

Q4 「採算が取れないサービスをどこまで税金で支えるかは、市民・有権者が民主的に判断すべき問題だ。」

→ ○ 【解説】効率だけでは社会の必要性を測れません。どこまで税金で支えるかは価値観によって答えが違います。その判断を民主的に決めるのが選挙・議会・市民の議論です。つまり「経済の問題」は「政治の問題」でもあり、私たち市民・有権者がその判断に参加することが重要です。

Q5 「採算が取れないサービスを廃止することで困る人が出ても、それは個人の問題であり社会が対応する必要はない。」

→ × 【解説】タクミのように「バスがなければ学校に来られない」という状況は個人の問題ではなく、社会のインフラ設計の問題です。誰もが教育を受けられること・移動できることは社会として守るべき権利であり、その判断を市民・有権者が行うのが民主主義の本質です。

◇ 振り返りの問い

1. 「赤字なら廃止してよい」という考え方に、どんな問題があるか。通学バスの例で考えよう。

【解答例】採算（効率）は市場の物差しだが、通学バスには「子どもが教育を受ける権利」「移動の権利」という別の物差しがある。赤字だからといって廃止すれば、タクミのように学校に通えなくなる生徒が出る。採算だけを物差しにすると、社会的に必要なサービスが失われる。

2. 「効率（採算）」と「公正（誰でも使えること）」のどちらが大切か。あなたの考えを理由とともに書こう。

【解答例】どちらも大切だが、基本的な教育・医療・移動手段については「公正」を優先すべきとする考え方が一般的。ただし無限に赤字を補い続けることには限界もある。どこで線を引くかは社会全体で決める問題であり、「どちらが絶対正しい」とは言えない。

3. 「どこで線を引くかは社会の判断」とはどういうことか。誰がその判断をするのかを含めて考えよう。

【解答例】採算が取れないサービスをどこまで税金で支えるかは、価値観によって答えが違ふ。その判断を民主的に決めるのが選挙・議会・市民の議論だ。つまり「経済の問題」は「政治の問題」でもあり、私たち市民・有権者がその判断に参加することが重要だ。これが主権者として経済を考えることの意味だ。

★ 自分の言葉へ

「確認問題と振り返りが終わりました。では最後に 30 秒。今日学んだことの核心を——自分の言葉で書いてください。ケンジの視点でもアカリの視点でも構いません。」

◆ 今日の持ち帰り

採算（効率）と誰でも使えること（公正）は別の物差しだ。市場だけでは維持できない公益サービスを制度で支える必要がある。そしてどこで線を引くかは、市民・有権者としての私たちが決める問題だ。

▷ 次回へ 採算が取れなくても必要なものがある——次回は「みんなに必要なのに、個人任せでは不足するもの」をさらに深く見る。公共と税の問題だ。

▼ 教師メモ

【ねらい】

「効率と公正」という二つの物差しを初めて明示的に対比させる講。「どちらが正しいか」ではなく「どちらをどこまで優先するかは社会の判断」という複眼的な見方を育てる。

【第 4 講との接続】

第 4 講「モールができて便利になったのに取り残された人がいる」は効率と公正のトレードオフの最初の伏線でした。この講でそれを「効率と公正」という言葉として明示的に回収します。

【主権者教育との接続】

「どこで線を引くかは社会の判断→市民・有権者が決める」という流れは、主権者教育の核心と重なります。経済の問題が政治の問題でもあることへの気づきを丁寧に引き出してください。

【探究課題について】

地域の公共サービス廃止問題は全国で起きています。積雪地帯ではバス・鉄道廃止が生死に関わる問題です。都市部でも深夜バスの廃止・路線集約が進んでいます。先生の地域の具体的な事例と結びつけることで、授業の学びが地域社会への関心・行動につながります。

【観点別評価】

① 知識・技能

A：採算性（効率）を重視する立場と、誰もが利用できること（公正）を重視する立場という 2 つの物差しの意味を正しく理解している。

B：効率と公正という言葉は知っているが、それぞれの意味を正しく理解して説明することが難しい。

C：効率と公正の意味を理解できていない。

② 思考・判断・表現

A：バス路線など市場だけでは維持が難しいサービスを具体例に、効率と公正が対立する場面と、それをどう支えるかという判断を、市民・有権者の視点から説明できる。

B：効率と公正が対立する場合があることは説明できるが、市民・有権者の判断という視点からの説明が弱い。

C：サービスの存続を行政や企業だけの問題として捉え、自分たち市民の判断であるという視点を持ってない。

③ 主体的に学習に取り組む態度

A：自分の地域や身の回りにある採算の取れにくい公共サービスについて関心を持ち、どう支えるべきかを自分の考えとしてまとめようとしている。

B：バス路線の事例には関心を持つが、自分の地域の問題として考えようとする姿勢は限定的である。

C：公共サービスの存続を自分とは関係のない問題として受け止めている。

【Cの生徒を引き上げるヒント】

体験活動（存続会議）で複数の立場を体験させたあと、板書案の「効率（採算）」「公正（誰でも使えるか）」の2軸を使って自分の言葉で説明させる。

【学習指導要領との対応】

公民的分野「私たちと経済」——市場の働き、対立と合意・効率と公正、財政の役割。

第 8 講

廊下の掃除と、税金の話 ——公共と税——

◆ 前回から

第 7 講で「採算が取れなくても社会に必要なサービスがある。その判断を市民・有権者が行う」ことを学んだ。今日はさらに深く掘り下げる。「みんなのためになることでも、なぜ個人任せでは足りないのか」という問いだ。

◆ 授業の最初の 30 秒（知的な小さな衝撃）

先生は問う。「日本の消防車は無料で来てくれます。火事になったとき『お金がないので来なくていいです』とは言えません。なぜでしょう。」

（生徒が考える。「みんなのお金で動いているから」「税金だから」などが出る）

「では、なぜ消防は市場に任せず、税金で運営するのでしょうか。今日はその『なぜ』を考えます。」

→そのまま物語へ。

◆ 今日の問い

みんなのためになることでも、なぜ一人ひとりに任せるだけでは足りないのか。そして税とは何のためにあるのか。

【今日の主軸となる基盤】

A 市場	B インフラ	C 生活	D 制度
○ 市場の限界	○ 防災・環境整備	◎ 安全・災害対策	◎ フリーライダー・外部性・税

📖 ケンジとアカリの物語 第 7 話 掃除サボりと、税金の「なぜ」

ケンジのクラスでは当番制で廊下を掃除している。最近、当番の日に「体調が悪い」「忘れた」と言ってサボる人が 3~4 人出てきた。「なんで自分たちだけやらないといけないの」という声が出ている。

ある日、社会の授業で先生が言った。「この掃除問題、実は税金と同じ構造なんだよ」

アカリは少し考えてから言った。「わかるかも。掃除って、やった人だけがきれいな廊下を使えるわけじゃないよね。サボった人も同じようにきれいな廊下を歩ける。だから『誰かがやればいい』と思う人が出てくる。税金も同じで、払わなくても道路や消防の恩恵は受けられる。だから『自分だけ払わなくてもいい』と思う人が出てくる」

ケンジが続けた。「でも全員がそう思ったら、廊下は誰も掃除しなくなる。税金も誰も払わなくなる。社会全体が困るのに、個人の判断だと『払わない方が得』になってしまう。これって、どこかで見たパターンだ」

アカリが言った。「第4講の競争の話と似てる。個人にとって合理的な判断が、社会全体では逆効果になる。じゃあどうすれば解決できるの？」

——ケンジとアカリ、二人の問いはどこが違うか。

ケンジ：「個人の合理的な判断が積み重なると社会全体に逆効果が生じるのはなぜか」

アカリ：「その問題を解決する仕組みとして、何が有効か。税はその答えになっているか」

グループで話し合おう

サボる人を責めればいい

ルールを守らない人を放置すると「自分もサボっていい」と思う人が増える。でも「責める」だけで解決するか。責める仕組みがなければどうなるか。（ケンジの問い）

ルールや税という仕組みが必要だ

罰則があれば抑止力になる。税で強制的に集めれば確実に資金ができる。でも「怒られるからやる・取られるから払う」だけでいいのか。（アカリの問い）

▶ この場面が教えてくれること

「自分一人くらいサボっても誰かがやるからいい」という考えが積み重なると全員が損をする。これを「フリーライダー問題」という。防災・環境・ワクチン・税も同じ構造だ。解決には「ルール・罰則・税・インセンティブ・共同意識」のどれが効くかを考えよう。

◎ 別の切り口

【より身近な切り口】「近所の公園にゴミを捨てる人がいる——公共の場所は誰のものか。誰が管理すべきか」

【より深い切り口】「温暖化対策：自分一人が節電しても意味がない？——個人の行動と社会全体の変化の関係」

【授業の流れ】

ステップ1 物語を読み、「掃除と税金はどこが同じか」を考える（8分）

「先生はなぜ掃除と税金が同じ構造だと言ったのか」をグループで考えさせる。

✦ 交通整理

「自分一人くらい……」という論理を生徒の言葉で引き出す。先生が言う前に生徒に言わせる。ケンジの問い（なぜ逆効果が生じるか）とアカリの問い（どうすれば解決できるか）を黒板に並べる。「これは第4講の競争の話と同じパターンだ」という接続も確認する。

ステップ2 「フリーライダー体験ゲーム」(14分)

全員に「掃除する・サボる」の2枚のカードを配り、密かに1枚を選ぶ。全体で何人がサボったかを確認し「何人サボると廊下が汚れるか」を話し合う。「サボりにくくなる仕組み」をグループで考える。

✦ 交通整理

「なぜサボったか」を問い「自分一人くらい」「誰かがやるだろう」を引き出す。これが「フリーライダー問題」と名前を与える。「サボりにくくなる仕組みの中で、税はどれに当たるか」を問い次のステップへつなぐ。

ステップ3 税の仕組みを整理する(12分)

「みんながやらなければならないことを確実にやる仕組みは何か？」→税という答えへ。「税は『みんなで出し合う会費』だ」と板書する。直接税・間接税・国税・地方税・財政のつながりを整理する。

✦ 交通整理

「取られるお金」vs「みんなの会費」の2つの見方を黒板に並べ「どちらの見方をすると社会を良くしやすいか」を問う。消費税の逆進性・累進課税という話は、アカリの視点「誰が一番負担しているか」と自然につながる。政治的に敏感な話題なので「どちらが正しいかを決める授業ではない」という前置きを忘れずに。

ステップ4 取引の外側に出るコストの問題(6分)

「工場の煙が周りの人に迷惑をかける問題はなぜ市場だけでは解決しにくいのか」と問う。「取引の外側に出るコストが第三者に及ぶ」という考え方を板書する。（高校では「外部不経済」という言葉で登場する）

✦ 交通整理

「このコストを誰が負担するべきか」→制度・税・規制が必要という流れで締める。

✍ 板書案

★ フリーライダー問題と税

「自分一人くらい……」が積み重なると → 全員が困る

これを「フリーライダー問題」という

同じ構造：防災・環境・ワクチン・税

税 = みんなで出し合う「会費」

道路・消防・学校・医療……個人ではできないことをまとめてやる

税の基本：

直接税（所得税など）：負担する人が直接納める

間接税（消費税など）：負担する人と納める人が違う

国税：国へ / 地方税：都道府県・市町村へ

税を集めて使う仕組み = 財政

足りない分 → 国債（将来世代の負担）

取引の外側に出るコスト（工場の煙・環境破壊など）

→ 市場だけでは解決しにくい → 制度・税・規制が必要

▶ 体験活動：フリーライダー体験ゲーム＋国家予算デザイナー

【フリーライダーゲーム】

全員に「掃除する・サボる」の 2 枚のカードを配り、密かに 1 枚を選ぶ。全体で何人がサボったかを確認し「何人サボると廊下が汚れるか」を話し合う。

【実践事例：雪かきゲーム】

このゲームを「雪かき」に置き換えた授業実践があります。積雪地帯の先生が開発したもので、「自分の家の前の雪をかくか・かかないか」という設定でゲームを行います。雪かきは北国・積雪地帯では文字通り生死に関わる問題です。「掃除サボり」より格段にリアルな設定になります。北海道以外でも「落ち葉清掃・側溝の掃除・防災訓練への参加」などに置き換えることができます。

【ゲーム理論との接続（先生へのメモ）】

今日の体験活動は「囚人のジレンマ」というゲーム理論の基本構造と同じです。個人の合理的判断が社会全体に逆効果をもたらすという構造の実感を優先してください。「ゲーム理論」という名前は高校・大学でこの実感を理論として整理するときに使うツールとして紹介する程度にとどめることを推奨します。

【国家予算デザイナーゲーム】

4 つの基盤（A 市場・B インフラ・C 生活・D 制度）に 100 点を配分するゲームをグループで行う。「どの基盤にいくら使うか、理由は何か」をグループで発表する。

追加の問い：

- ・「景気が悪いとき、どの基盤への支出を増やすべきか」

- ・「将来世代への負担を考えると、今どこを削るべきか」

確認問題（○×＋解説）

Q1 「フリーライダー問題とは、一人ひとりの合理的な判断が積み重なることで、社会全体にとって逆効果な結果が生じる問題のことだ。」

→ ○ 【解説】「自分一人くらいサボっても誰かがやるから大丈夫」という判断は個人にとって合理的に見えます。しかし全員がそう考えると誰も掃除しなくなり全員が困ります。税・防災・環境問題・ワクチン接種など、同じ構造が社会のあちこちに存在します。

Q2 「消防・警察・道路などのサービスは、利用者が料金を払う市場の仕組みで運営する方が効率的だ。」

→ × 【解説】消防・警察・道路などは「みんなが使う・排除できない・使っても減らない」という性質を持ちます。市場に任せると「払える人しか使えない」「フリーライダーが増える」という問題が生じます。だからこそ税で運営する公共サービスとして位置づけられています。

Q3 「消費税は収入が少ない人ほど負担感が大きくなる傾向があり、これを『逆進性』という。」

→ ○ 【解説】消費税は収入に関わらず同じ税率です。そのため収入が少ない人ほど消費に占める税の割合が高くなります。これを「逆進性」といいます。一方、所得税は収入が多いほど税率が高くなる「累進課税」です。どちらの仕組みが公正かは価値観によって答えが違います。

Q4 「工場が生産活動で出す煙による健康被害は、工場と消費者の取引の中に含まれているため、市場の仕組みで自然に解決される。」

→ × 【解説】工場と消費者の取引には、周辺住民の健康被害というコストが含まれていません。取引の外側に出るコストが第三者に及ぶ問題は、市場の仕組みだけでは解決しにくい。規制・税・補償という制度的な対応が必要です。高校では「外部不経済」という言葉で登場します。

Q5 「税は『取られるお金』ではなく『みんなで出し合う会費』として考えると、何に使うべきかを自分事として議論しやすくなる。」

→ ○ 【解説】「取られるお金」という見方では「なるべく払いたくない」という発想になります。「みんなの会費」という見方では「何に使うべきか」「誰のために使うべきか」という議論が生まれます。民主主義の社会では、税の使い道を市民が議論して決めることが重要です。

◇ 振り返りの問い

1. 「フリーライダー問題」とは何か。掃除の例と税の例を使って説明しよう。

【解答例】「自分一人くらいサボっても誰かがやるから大丈夫」という判断が全員に積み重なると誰も掃除しなくなり全員が困る。税も同様で「自分だけ払わなくても道路や消防は使える」という判断が広がると税収が不足し公共サービスが崩壊する。個人にとって合理的な行動が社会全体では逆効果になる逆説だ。

2. 直接税と間接税の違いを、所得税と消費税を例に説明しよう。

【解答例】直接税は税を負担する人が直接納める税。所得税は自分の収入に応じて自分が納める。間接税は税を負担する人と納める人が違う税。消費税は消費者が負担するが、実際に税務署に納めるのはお店（企業）だ。消費税には収入が少ない人ほど負担感が大きくなる「逆進性」がある。

3. 「工場の煙による健康被害」はなぜ市場だけでは解決しにくいのか。「取引の外側に出るコスト」という言葉を使って説明しよう。

【解答例】工場と消費者の取引では「製品の価格・品質」だけが交渉される。周辺住民の健康被害というコストは取引の外側に出ており、市場の価格に反映されない。そのため工場は健康被害のコストを負担せずに生産を続けられる。この問題を解決するには規制・環境税・補償という制度的な対応が必要だ。

★ 自分の言葉へ

「確認問題と振り返りが終わりました。では最後に 30 秒。今日学んだことの核心を——自分の言葉で書いてください。ケンジの視点でもアカリの視点でも構いません。」

◆ 今日の持ち帰り

みんなにとって大事なことで個人任せでは十分に進まない。フリーライダー問題を解決するために、税・ルール・協力の仕組みが必要だ。税は「取られるお金」ではなく「みんなで出し合う会費」だ。
▷ 次回へ 「みんなでやる必要があること」は人生のリスクにも及ぶ——次回は個人では乗り越えにくいリスクを社会で分け合う「社会保障」を見る。

▼ 教師メモ

【ねらい】

「税＝取られるお金」という印象を払拭し「社会全体で支える仕組み」として位置づける。フリーライダー問題という概念を通じて、個人の合理的判断と社会全体の利益が一致しない構造を理解させる。

【用語について】

「外部性」「外部不経済」は高校「政治・経済」で市場の失敗の一つとして登場します。中学段階では「取引の外側に出るコストが第三者に及ぶ問題」という表現を使い、用語は教師メモにとどめます。「フリーライダー問題」も中学の学習指導要領には明示されていませんが、概念として理解させることは十分可能です。

【ゲーム理論について】

今日の体験活動は「囚人のジレンマ」というゲーム理論の基本構造と同じです。ゲーム理論は 1994 年・2005 年・2012 年のノーベル経済学賞がゲーム理論関連の研究に贈られており、経済学・政治学・生物学など幅広い分野で使われています。ただし中学段階では理論の名前より「個人の合理的判断が社会全体に逆効果をもたらす」という実感を優先してください。

【税の公正について】

消費税の逆進性・累進課税という話は、アカリの視点「誰が一番負担しているか」と自然につながります。政治的に敏感な話題でもあるため、「どちらが正しいかを決める授業ではない」という前置きを忘れずに。

【観点別評価】

① 知識・技能

A：直接税（納税者と負担者が同じ）と間接税（納税者と負担者が異なる）の違いを、具体的な税の種類を挙げて正しく理解している。

B：直接税・間接税という言葉は知っているが、具体的な税の種類を挙げて説明することが難しい。

C：税の種類による違いを理解できていない。

② 思考・判断・表現

A：「自分一人くらい負担しなくても」という個人の合理的な判断が積み重なると全体で問題が生じるというフリーライダー問題の構造を踏まえ、税を「みんなの会費」として位置づけて説明できる。

B：フリーライダー問題や税の役割は理解しているが、両者を結びつけて自分の言葉で説明することが難しい。

C：フリーライダー問題を「ずるい人がいる」という個人の問題としてしか捉えられない。

③ 主体的に学習に取り組む態度

A：廊下の掃除など身近な「みんなのための行動」を例に、自分がどう関わるべきかを当事者として粘り強く考えようとしている。

B：フリーライダー問題には関心を持つが、自分の行動として考えようとする姿勢は限定的である。

C：フリーライダー問題や税を自分とは関係のない制度上の話として受け止めている。

【Cの生徒を引き上げるヒント】

体験活動（フリーライダーゲーム）で「自分一人くらい」の感覚を体感させ、確認問題 Q1 の解説を身近な例（掃除・雪かき等）に当てはめさせる。

【学習指導要領との対応】

公民的分野「私たちと経済」——財政の役割、税の種類と仕組み、社会保障の意義。

第 9 講

お父さんが、制度を使えなかった理由 ――社会保障――

◆ 前回から

第 8 講で「みんながタダ乗りしようとする問題には税と制度が必要」を学んだ。今日は「個人では乗り越えられないリスク」を社会で分け合う――社会保障を見る。フリーライダー問題への対応として税が必要なように、人生のリスクへの対応として社会保障が必要だ。

◆ 授業の最初の 30 秒（知的な小さな衝撃）

先生は問う。「もし明日、お父さんかお母さんが突然病気で働けなくなったら、あなたの家はどうなりますか。1 週間・1 か月・半年・1 年――どこかで限界が来ますか。」

（生徒が静かに考える。深刻な雰囲気が出ることもある）

「これは特別な家庭の話ではありません。誰にでも起きうることです。今日はその『もしも』に社会がどう備えるかを考えます。」

→そのまま物語へ。

◆ 今日の問い

大きな病気・けが・失業・老後は、なぜ自分や家族だけでは支えきれないことがあるのか。そして社会保障とは「弱者への恵み」なのか、それとも別の何かなのか。

【今日の主軸となる基盤】

A 市場	B インフラ	C 生活	D 制度
○ 雇用との関係	○ 医療提供体制	◎ リスク・生活保障	◎ 自助・共助・公助・社会保障

📖 ケンジとアカリの物語 第 8 話 制度を、使えなかった

ある夜、お母さんがケンジに話してくれた。お父さんが病気で働けなくなったとき、最初は「自分たちで何とかしよう」と思っていた。でも治療費と生活費が同時にかかり、貯金は 3 か月で底をついた。

「傷病手当金っていう制度があるって、後で知ったんだよね。でも手続きが複雑で、お父さんが病気のときに誰がやるの、って感じで。知ってたら使えたのに」

ケンジは初めて知った。「制度がある」と「使えること」は、違うんだ。

翌日アカリにこの話をした。アカリは少し黙ってから言った。「うちも似たようなことがあった。お父さんがいなくなってから、お母さんが一人で家計を支えてる。ひとり親家庭への支援制度があるって知ったのは、ずっと後だった。制度があっても、しんどいときに調べる余裕なんてない」

ケンジが言った。「でもさ、なんで制度を使うことが、後ろめたいことみたいに感じるんだろう。お母さんも最初『人の世話にはなりたくない』って言ってた」

アカリが答えた。「それって、『自分で何とかするべきだ』という考え方が染みついているからじゃないかな。でも、社会保障って本当に『弱い人への恵み』なの？ みんなが保険料を払って、みんながいざというとき使える仕組みだとしたら、使うことは権利なんじゃないかな」

ケンジは思った。「第8講の税の話と同じだ。フリーライダー問題を解決するために税があるように、人生のリスクを分け合うために社会保障がある。使うことは恥ずかしいことじゃなくて、みんなで出し合った会費を受け取ることだ」

——ケンジとアカリ、二人の問いはどこが違うか。

ケンジ：「制度があっても使えない・使わない理由は何か。社会保障の仕組みはどうなっているか」

アカリ：「社会保障を使うことへの後ろめたさはどこから来るか。それは正しい感覚か」

グループで話し合おう

自分たちで乗り越えるべきだった

「自助」の精神は大切だ。でも中学生が家族の収入を支えることはできるか。「自分だけで乗り越える」限界はどこか。（ケンジの問い）

制度を積極的に使うべきだった

社会保障を使うことは「恥ずかしいこと」ではなく「権利を使うこと」だ。でもなぜ後ろめたく感じるのか——その感覚はどこから来るのか。（アカリの問い）

▶ この場面が教えてくれること

人生の大きなリスク（病気・けが・失業・老後）は個人の努力だけでは乗り越えられないことがある。だから社会全体でリスクを分け合う「社会保障」がある。これは「弱い人への恵み」ではなく、誰もが使い得る「社会の安全網」であり「権利」だ。使うことへの後ろめたさは、社会保障の本質を誤解しているかもしれない。

◎ 別の切り口

【より身近な切り口】「仲の良い友達の家が急にお金に困った——就学援助制度など、知っていれば助けられるかもしれない」

【より深い切り口】「少子高齢社会で社会保障費が膨らんでいる——給付削減か増税か。世代間の公正をどう考えるか」

【授業の流れ】

ステップ 1 物語を読み、「なぜ後ろめたく感じたのか」を考える（10 分）

「なぜ制度を使うことが後ろめたく感じられたのか」をグループで話し合わせる。

✦ 交通整理

「制度を使うのは恥ずかしい」という感覚が出たら「なぜ恥ずかしいと感じるか」を問い返す。ケンジの問い（仕組みとして何が起きているか）とアカリの問い（後ろめたさはどこから来るか）を黒板に並べる。「制度は弱者への恵みか・権利か」という問いを立てる。

ステップ 2 「保険のしくみ」体験活動（14 分）

「みんなで少しずつ出し合うことで大きなリスクを分け合える」を体感させる。クラス 30 人で「来年、1 人が 100 万円の治療費がかかるとしたら、どう備えるか」を計算する。

✦ 交通整理

パターン A（自助）：全員が 100 万円貯金→合計 3,000 万円必要。パターン B（保険）：30 人で割ると一人約 3.3 万円。「なぜパターン B の方が効率的か」を議論する。「保険料を払っても使わなかった人は損をしたのか」という問いで「リスクを分け合うことの意味」を深める。

ステップ 3 社会保障の仕組みと少子高齢化の課題を整理する（12 分）

「自助・共助・公助」の 3 つを板書。社会保障の 4 本柱を紹介。さらに少子高齢化と社会保障費の課題を整理する。

✦ 交通整理

「社会保障は権利だ（第 9 講）→しかし財源を確保しなければ維持できない（少子高齢化・年金問題）」という二つの視点を板書に並べる。「権利として使う」と「持続可能にする」という問いを立てて締める。

ステップ 4 「制度があっても届かない」問題を確認（4 分）

「制度がある」と「使えること」は違う——第 5 講・第 6 講と同じ構造をここでも確認する。

✦ 交通整理

「知らない・手続きが難しい・後ろめたい——どれが一番大きな壁か」を問い、「制度が全員に届くためには何が必要か」で締める。

✎ 板書案

★ 社会保障

人生のリスク：病気・けが・失業・老後・貧困

→ 個人だけでは乗り越えられないことがある

自助：自分で備える

共助：みんなで支え合う（保険・地域）

公助：社会全体で支える（税・制度）

社会保障の 4 本柱：

- ① 社会保険（医療・年金・雇用・介護・労災）
- ② 公的扶助（生活保護）
- ③ 社会福祉（障害者・高齢者・子どもへの支援）
- ④ 公衆衛生（感染症対策・保健所など）

社会保障 = 「弱者への恵み」ではなく

→ 誰もが使い得る「社会の安全網」

→ 使うことは「権利」だ

課題：少子高齢化 → 支える側（現役）減少

年金は賦課方式 → 少子化で将来世代の負担増

「権利として使う」と「持続可能にする」両方必要

困ったら → 市区町村の福祉窓口へ

▶ 体験活動：保険のしくみゲーム

クラス全員（30 人と仮定）で考える。「来年、クラスの誰か 1 人が大きな病気になり、100 万円の治療費がかかる」とします。」

パターン	内容と計算
A（自助）：各自が自分で備える	全員が 100 万円を貯金する必要がある。合計 3,000 万円。
B（共助・保険）：みんなで出し合う	30 人で 100 万円を割ると、一人約 3.3 万円。
なぜ B の方が効率的か	一人ではリスクに備えきれない金額も、みんなで分け合えば負担が小さくなる。これが保険の本質。

追加の問い：

- ・「保険料を払ったのに病気にならなかった人は損をしたのか」
- ・「保険に入れない人・入らない人はどうなるか」
- ・「だから社会保険（強制加入）という仕組みがあるのはなぜか」

確認問題（○×＋解説）

Q1 「社会保障は経済的に困っている人だけが使う制度であり、普通の生活をしている人には関係がない。」

→ × 【解説】社会保障は「弱者への恵み」ではなく、誰もが使い得る「社会の安全網」です。医療保険は病気になった人全員が使い、雇用保険は失業した人が使い、年金は老後に全員が受け取ります。「今は関係ない」と思っている、誰にでも病気・失業・老後は訪れます。

Q2 「社会保険料を払ったのに病気にならなかった人は、お金を損したことになる。」

→ × 【解説】保険は「リスクをみんなで分け合う仕組み」です。今年病気にならなかったのは幸運ですが、来年・再来年はわかりません。「使わなかった＝損」ではなく「いざという時のために備えられた」と考えるのが保険の本質です。第8講の「税は会費」と同じ考え方です。

Q3 「生活保護を受けることは、憲法が保障する権利の行使であり、後ろめたいことではない。」

→ ○ 【解説】憲法第25条は「すべて国民は、健康で文化的な最低限度の生活を営む権利を有する」と定めています。生活保護はその権利を具体化した制度です。使うことへの後ろめたさは社会的な偏見から来ることが多く、制度の本質とは異なります。

Q4 「日本の年金制度は『賦課方式』であり、今の現役世代が払った保険料で今の高齢者を支える仕組みだ。そのため少子化が進むと将来世代の負担が増えるという問題がある。」

→ ○ 【解説】年金は「自分が若いころに払った保険料を老後に受け取る」貯蓄ではなく、今の現役世代が今の高齢者を支える仕組みです。少子化が進むと支える側（現役世代）が減り、一人当たりの負担が増えます。これが「年金は本当にもらえるのか」という不安の根拠です。

Q5 「制度があれば、必要な人全員にその制度が届く。」

→ × 【解説】「制度がある」と「使えること」は違います。制度を知らない・手続きが複雑でできない・使うことへの後ろめたさがある――これらが「制度があっても届かない」問題を生みます。第5講（消費者保護）・第6講（労働基準法）と同じ構造です。制度を作ることと、制度を全員に届けることは別の課題です。

◇ 振り返りの問い

1. 社会保障が「弱者への恵み」ではなく「誰もが使い得る社会の安全網」だといえるのはなぜか。保険のしくみを使って説明しよう。

【解答例】保険は「みんなで少しずつ出し合い、リスクが現実になった人をみんなで支える仕組み」だ。病気・失業・老後は誰にでも起きうるリスクであり、社会保険はそのリスクをみんなで分け合っている。「弱者への恵み」ではなく「みんながリスクに備えるための仕組み」だから、使うことは権利の行使だ。

2. 「自助・共助・公助」の3つをそれぞれ説明し、なぜ3つが必要かを考えよう。

【解答例】自助：自分で貯金・保険に入るなど備える。共助：地域・家族・職場などで支え合う。公助：税を使った社会保障で社会全体で支える。自助だけでは限界がある（病気が長引けば貯金が尽きる）。共助だけでは不公平が生じる（支え合える人と支え合えない人がいる）。だから公助（社会保障）が必要だ。

3. 少子高齢化が社会保障にどんな問題をもたらすかを説明し、「権利として使う」と「持続可能にする」という二つの視点が必要な理由を考えよう。

【解答例】少子高齢化で高齢者が増え現役世代が減ると、社会保険料の負担が増え年金給付水準が下がる可能性がある。社会保障費の増大が財政を圧迫する。社会保障は権利だが、財源がなければ維持できない。だから「今必要な給付を守る」と「将来世代の負担を減らす」のバランスをどうとるのが重要な課題だ。これは世代間の公正という問いでもある。

★ 自分の言葉へ

「確認問題と振り返りが終わりました。では最後に 30 秒。今日学んだことの核心を——自分の言葉で書いてください。ケンジの視点でもアカリの視点でも構いません。」

◆ 今日の持ち帰り

人生のリスクは個人だけでは乗り越えられないことがある。社会保障は「弱者への恵み」ではなく、誰もが使い得る「社会の安全網」であり「権利」だ。使うことへの後ろめたさは、社会保障の本質への誤解から来ているかもしれない。

▷ 次回へ ここまで個別の仕組みを見てきた。次回は「経済全体をどう見るか」——マクロ経済の視点に立つ。

▼ 教師メモ

【ねらい】

「社会保障の 4 本柱を覚える」ではなく「社会保障は権利であり、安心があるから社会・市場が活性化する」という構造的な理解を目指す。使うことへの後ろめたさへの問いは、日本社会の「自助」偏重という文化的な問題とも関わっており、丁寧に扱う。

【少子高齢化と社会保障について】

日本の社会保障費は 2023 年度で約 134 兆円。年金の賦課方式については「自分の積み立てではない」という誤解が多い。「年金はもらえない」という極端な言説も「年金は絶対安全」という過信も、どちらも生徒に持たせてはいけません。「少子化が続けば給付水準は下がる可能性がある・しかし制度そのものがなくなることはない・だから持続可能にするための議論が必要だ」という冷静な認識を育てることを目指してください。

【第 4・5・7 講との接続】

「制度があっても届かない」という問題はこの講で三度目の登場です。繰り返しこの問題が出てくることで「制度を作ることと届けることは別の課題」という認識が定着します。板書で三つを並べて見せると効果的です。

【観点別評価】

① 知識・技能

A：自助・共助・公助という社会保障の仕組みと、少子高齢化が制度の持続可能性に与える影響を正しく理解している。

B：自助・共助・公助という言葉は知っているが、少子高齢化との関係を正しく理解して説明することが難しい。

C：社会保障の仕組みを理解できていない。

② 思考・判断・表現

A：病気・失業・介護など個人では備えきれないリスクを社会全体で分け合う仕組みとして社会保障を捉え、それが「弱者への恵み」ではなく誰もが使い得る「権利」であることを自分の言葉で説明できる。

B：社会保障が困った人を助ける仕組みであることは説明できるが、「権利」という捉え方まで踏み込んだ説明が難しい。

C：社会保障を「弱い立場の人への施し」として捉えている。

③ 主体的に学習に取り組む態度

A：家族や自分自身がいずれ直面しうるリスクとして社会保障を捉え、制度を持続可能にする責任について自分の考えを持とうとしている。

B：社会保障の事例には関心を持つが、自分自身の将来のリスクとして考えようとする姿勢は限定的である。

C：社会保障を自分とは関係のない他人の問題として受け止めている。

【Cの生徒を引き上げるヒント】

体験活動（保険のしくみゲーム）でリスクを分け合う計算を体感させ、板書案の「自助・共助・公助」と確認問題 Q1・Q3 の解説で「権利」という捉え方を補強する。

【学習指導要領との対応】

公民的分野「私たちと経済」——社会保障の意義と課題、少子高齢社会への対応。

第 10 講

商店街がどんどん閉まっていく ――合成の誤謬・財政政策・金融政策――

◆ 前回から

第 9 講で「人生のリスクを社会で分け合う社会保障」を学んだ。今日は視点をさらに広げる。個人・企業・政府という経済の主体が全体としてどう動くか――マクロ経済の視点に立つ。

◆ 授業の最初の 30 秒（知的な小さな衝撃）

先生は問う。「節約は良いことですか？」

（ほぼ全員が「良いこと」と答える）

「では、日本国民全員が同時に節約したら、何が起きるでしょうか。」

（生徒が考える。「お店が儲からない」「景気が悪くなる」という答えが出始める）

「個人にとって正しいことが、社会全体では逆効果になる――今日はその逆説を考えます。」

→そのまま物語へ。

◆ 今日の問い

個人にとっては正しい行動でも、みんなが同じことをすると社会全体で困ることがある。なぜか。そして誰がどうやってそのバランスを整えるのか。

【今日の主軸となる基盤】

A 市場	B インフラ	C 生活	D 制度
◎ 景気・消費・投資・GDP	○ 公共投資	○ 生活安定	◎ 財政政策・金融政策

📖 ケンジとアカリの物語 第 9 話 商店街がどんどん閉まっていく

物価が上がり続け（輸入コスト上昇など供給側の要因も重なり）、ケンジの家族は外食を月 1 回に減らした。欲しいものも「必要になるまで買わない」ことにした。

半年後、近所のパン屋・文具屋・八百屋が次々と閉まった。「お客が来なくなった」という理由だ。タクミが言った。「うちのお父さん、そのパン屋でパートしてたんだけど、仕事なくなった」

アカリは思った。「ケンジの家族が節約したのは仕方がない。うちも同じだ。でも、みんながそうしたら……お店が困るのは当たり前だ。でも誰も悪くない。これって、どこかで見たパターンだ」

ケンジが言った。「第 8 講のフリーライダー問題と似てる。個人の合理的な判断が積み重なると社会全体が困る。でも今回は『サボる』じゃなくて『節約する』という、むしろ正しい行動なのに逆効果になっている」

アカリが言った。「政府や日銀って、このとき何をしているんだろう。一人の行動は意味があるの？ 社会全体の動きを変えるには何が必要なの？」

——ケンジとアカリ、二人の問いはどこが違うか。

ケンジ：「個人の合理的な行動がなぜ社会全体の悪循環を生むのか」

アカリ：「その悪循環を止めるために誰が何をすべきか。一人の行動は意味があるか」

グループで話し合おう

節約は正しかった。町がさびれたのは自分のせいではない

個人の節約は合理的な判断だ。でもみんながそうすると地元の店はさらに閉まっていく。「個人の合理的な行動」がなぜ「社会全体の困った状況」を生むのか。（ケンジの問い）

みんなが少しずつ使えば変わるかもしれない

一人の行動には限界がある。でも「自分一人では意味がない」と全員が思うと何も変わらない。社会全体の動きを変えるには、個人の行動と社会の仕組みの両方が必要ではないか。（アカリの問い）

▶ この場面が教えてくれること

一人ひとりが節約するのは合理的だ。でも全員が同じことをすると「お店が売れない→閉店→雇用が減る→収入が減る→さらに節約」という悪循環になる。これを「合成の誤謬」という。この悪循環を止めるために政府と日本銀行が動く。ただし景気変動の要因には需要側（節約による消費減少）だけでなく、供給側（輸入コスト上昇・エネルギー高騰によるコストインフレ）もある。原因によって有効な政策が異なる点も重要だ。

◎ 別の切り口

【より身近な切り口】「みんなが同時に傘を買おうとしたら売り切れになった——個人の合理的行動が全体を困らせる構造」

【より深い切り口】①政府は景気刺激（財政出動）すべきか、財政健全化すべきか

②食品の消費税減税は政策として正しいか——今と将来のバランスをどう考えるか

②日本銀行はどのような政策で物価の安定をはかろうとしているのか

【授業の流れ】

ステップ 1 物語を読み、「なぜ悪循環が起きたのか」を考える（8 分）

「誰が悪いわけでもないのに、なぜ町がさびれていったのか」をグループで考えさせる。

✦ 交通整理

「悪循環」に気づかせてから「合成の誤謬」という名前を与える。先に名前を言わない。ケンジの問い（なぜ逆効果が生じるか）とアカリの問い（誰が何をすべきか）を黒板に並べる。第 8 講「フリーライダー問題」との共通構造を確認する。「景気変動の要因は需要側だけではなく、供給側（コストインフレ）もある」という点も板書に加える。

ステップ 2 マクロ経済の基本概念を整理する（10 分）

「経済全体を大きな視点で見ること」をマクロ経済と呼ぶことを説明する。GDP という概念を平易に紹介する。

✦ 交通整理

「GDP の数字を覚えることより、なぜ GDP が動くかの仕組みを理解することが大切」と伝える。「日本の GDP は約 550 兆円（2023 年）。一人当たりになると約 440 万円」という数字を示すと実感が生まれる。GDP の変化が景気の指標になること、ただし GDP だけでは格差・環境・幸福度など社会のすべては測れないことも伝える。

ステップ 3 政府と日銀の役割を説明する（12 分）

財政政策（政府がお金を使って需要を補う）と金融政策（日銀が金利を動かして消費・投資を促す）を平易に説明する。

✦ 交通整理

「政府と日銀はなぜ別々にあるのか」を問うと「政府が自由にお金を刷れると財政規律が失われる」という独立性の意味が出てくる。深入りする必要はないが「なぜ別々か」という問いを立てておく。国債については「将来世代の負担」と「国民の資産でもある（リカードの中立性）」という二つの見方があり、見解が分かれることを伝える。

ステップ 4 フューチャーデザインと将来世代への視点（5 分）

「今の政策判断が将来世代にどう影響するか」という問いを立てる。「将来世代の代理人として考えたら、どう判断が変わるか」を問いかけて締める。

✦ 交通整理

「国家予算デザイナーゲームを現在世代チームと 2050 年の将来世代チームに分けて行くと、同じ予算配分でも全く異なる結論が出ることがある」というフューチャーデザインの視点を紹介する。

✍ 板書案

★ 合成の誤謬と財政・金融政策

合成の誤謬：個人に合理的な行動 → 社会全体では逆効果

節約 → お店が売れない → 閉店 → 雇用減

→ さらに節約……（悪循環）

景気変動の要因：

需要側：消費・投資の減少（合成の誤謬など）

供給側：コスト上昇・エネルギー高騰（コストインフレ）

→ 原因によって有効な政策が異なる

経済の三主体：家計・企業・政府

GDP = 社会全体の稼ぎ（景気の変化の目安）

悪循環を止める：

財政政策（政府）：公共事業・減税で需要を補う

金融政策（日銀）：金利を動かして消費・投資を促す

政府と日銀が別々にある理由 → 財政の独立性

国債：政府の借金 = 将来世代の負担という見方と

国民の資産でもあるという見方（見解が分かれる）

フューチャーデザイン：将来世代の視点で考えると？

▶ 体験活動：国家予算デザイナー

4つの基盤（A 市場・B インフラ・C 生活・D 制度）に100点を配分するゲームをグループで行う。「どの基盤にいくら使うか、理由は何か」をグループで発表する。

【フューチャーデザイン版】

第一ラウンド（現在世代として）：「今の社会にとって必要な配分」を議論する。

第二ラウンド（2050年の将来世代として）：「30年後の自分たちが受け継ぐ社会」という視点で同じ予算を配分し直す。

二つの配分を比較して「何が変わったか・なぜ変わったか」を議論する。「現在世代と将来世代で優先順位が違う理由」を言語化させる。

確認問題（○×＋解説）

Q1 「個人が節約することは合理的な行動だが、社会全体の全員が同時に節約すると景気が悪化することがある。」

→ ○ 【解説】これが「合成の誤謬」です。個人にとって合理的な節約も、全員が同時に行うとお店の売上が減り閉店・失業・さらなる節約という悪循環を生みます。個人レベルと社会レベルでは「正しい行動」が異なることがあります。第8講のフリーライダー問題と同じ「個人の合理的判断が社会全体に逆効果をもたらす」という構造です。

Q2 「GDP の水準そのものが景気の良し悪しを示しており、GDP が高い国は必ず景気が良い状態にある。」

→ × 【解説】GDP は「社会全体の稼ぎの合計」ですが、景気判断するには GDP の水準よりも「GDP の変化（増えているか・減っているか）」の方が重要です。また景気は消費・投資・雇用・物価など複数の指標で総合的に判断するものであり、GDP だけで全てがわかるわけではありません。

Q3 「財政政策は日本銀行が行い、金融政策は政府が行う。」

→ × 【解説】逆です。財政政策（公共事業・減税など）は政府が行い、金融政策（金利の調整など）は日本銀行が行います。政府と日銀が別々に存在するのは、政府が自由にお金を操作できると財政規律が失われるリスクがあるためです。

Q4 「景気が悪いとき、日本銀行が金利を下げると、企業や家計がお金を借りやすくなり消費・投資が増えやすくなる。」

→ ○ 【解説】金利とは「お金を借りるコスト」です。金利が低いとお金を借りやすくなるため、企業は投資を増やし家計も住宅ローンなどを組みやすくなります。これが消費・投資を刺激し景気回復につながります。ただし金利を下げ続けると副作用（インフレ・資産バブル）も生じます。

Q5 「景気変動の要因は需要側（消費の減少など）だけであり、供給側（コスト上昇など）の要因は景気には関係しない。」

→ × 【解説】景気変動には需要側と供給側の両方の要因があります。供給側では輸入コストの上昇・エネルギー価格の高騰などによる「コストインフレ」が景気に影響します。原因によって有効な政策が異なるため、需要側と供給側のどちらが主な原因かを見極めることが重要です。

◇ 振り返りの問い

1. 「みんなが節約すると景気が悪くなる」という逆説を「合成の誤謬」という言葉を使って説明しよう。

【解答例】合成の誤謬とは「個人にとって合理的な行動が積み重なると社会全体では逆効果になる」現象だ。節約は個人にとって合理的だが全員が同時に行うとお店の売上が減り閉店・失業・さらなる節約という悪循環になる。第8講のフリーライダー問題と同じ「個人の合理的判断が社会全体に逆効果をもたらす」構造だ。

2. 財政政策と金融政策はどう違うか。景気が悪いときにどのような対応をするかを含めて説明しよう。

【解答例】財政政策は政府が行う。景気が悪いとき公共事業を増やしたり減税したりして需要を補う。金融政策は日本銀行が行う。景気が悪いとき金利を下げてお金を借りやすくし消費・投資を促す。どちらも「悪循環を止める社会の舵取り」だが、主体と手段が異なる。政府と日銀が独立しているのは財政規律を守るためだ。

3. 「今の政策判断が将来世代にどう影響するか」を、フューチャーデザインの視点から考えよう。

【解答例】今の政策判断（財政出動・国債発行・社会保障の水準など）は将来世代が受け継ぐ社会の条件を決める。フューチャーデザインは「将来世代の代理人」として現在の意思決定に関わる手法で、30年後の自分たちの視点で考えると今とは異なる優先順位が見えてくる。現在世代の利益だけでなく、将来世代への責任も考えることが市民・有権者としての重要な役割だ。

★ 自分の言葉へ

「確認問題と振り返りが終わりました。では最後に 30 秒。今日学んだことの核心を——自分の言葉で書いてください。ケンジの視点でもアカリの視点でも構いません。」

◆ 今日の持ち帰り

個人に合理的な行動でも社会全体では逆効果になることがある（合成の誤謬）。財政政策と金融政策はそのバランスを整える社会の舵取りだ。そして今の政策判断は将来世代への影響を持つ。

▷ 次回へ ケンジとアカリの経済の旅は最後の問いへ向かう——「私たちの経済はどこから来て、どこへ向かうのか」。国際経済と第 1 講への帰還。

▼ 教師メモ

【ねらい】

政策の名称暗記にならないこと。「合成の誤謬」を通じて個人と社会の関係を考えさせることが核心。GDP は「覚える指標」ではなく「経済全体を見る窓」として位置づける。

【景気変動の要因について】

需要側だけでなく供給側（コストインフレ）の要因も扱うことが重要です。2022 年以降の日本で起きた物価上昇はコストインフレのパターンに近い。この場合、需要を刺激する財政政策・金融緩和だけでは解決しにくいという難しさがあります。

【国債について】

国債については「将来世代の負担」という見方と「国民の資産でもある（リカードの中立性命題）」という見方があり、経済学者の間でも見解が分かれます。単純に「国債は悪いもの」と断言せず、複眼的に考えさせてください。

【フューチャーデザインについて】

京都先端科学大学の西條辰義特任教授らが提唱する手法で、岩手県矢巾町・京都府など自治体での実践も始まっています。「将来世代の代理人として考えると判断が変わる」という体験が重要です。

【観点別評価】

① 知識・技能

- A：政府が行う財政政策と日本銀行が行う金融政策について、主体と手段の違いを正しく理解し説明できる。
- B：財政政策・金融政策という言葉は知っているが、両者の違いを正しく理解して説明することが難しい。
- C：財政政策と金融政策を区別できていない。

② 思考・判断・表現

- A：節約のように個人にとって合理的な行動が、全員で行うと社会全体には逆効果をもたらす場合がある（合成の誤謬）ことを具体例をもとに説明し、そのバランスを整える政策の役割と結びつけて考えられる。
- B：合成の誤謬という考え方は理解しているが、政策の役割と結びつけて説明することが難しい。
- C：個人の行動と社会全体の結果を結びつけて考えることができない。

③ 主体的に学習に取り組む態度

- A：商店街が閉まっていくという身近な出来事から景気の変動へと視野を広げ、今の経済の判断が将来世代に与える影響を自分の言葉で考えようとしている。
- B：商店街の事例には関心を持つが、社会全体や将来世代の問題として考えようとする姿勢は限定的である。
- C：景気の変動を自分とは関係のない出来事として受け止めている。

【Cの生徒を引き上げるヒント】

冒頭の「みんなが節約したら」の問いを個別に問い返し、板書案の「合成の誤謬」の悪循環図を第8講のフリーライダー問題（確認問題 Q1）と結びつけさせる。

【学習指導要領との対応】

公民的分野「私たちと経済」——財政の役割、金融の仕組み、景気変動と経済政策。

第 11 講

ケンジのスマホは、どこから来たのか ――国際経済と、旅の終わりに――

◆ 前回から

第 10 講で「個人の合理的な行動が社会全体に逆効果をもたらすことがある。財政政策・金融政策はそのバランスを整える」ことを学んだ。今日は視点をさらに外へ広げる。私たちの経済は国境を越えてつながっている。そしてその問いは、第 1 講の「当たり前の毎日なぜ成り立つのか」という出発点に戻ってくる。

◆ 授業の最初の 30 秒（知的な小さな衝撃）

先生はスマホを取り出して問う。「このスマホ、どこで作られたと思いますか。日本？中国？アメリカ？」

（生徒が考える）

「実はスマホの部品は 20 か国以上から集まっています。設計はアメリカ、半導体は台湾・韓国、レアメタルはコンゴ、組み立ては中国――これが現代のグローバルサプライチェーンです。では、その一部が止まったら何が起きるでしょうか。」

→そのまま物語へ。

◆ 今日の問い

私たちの経済はなぜ国境を越えてつながっているのか。そのつながりがもたらす恩恵とリスクとは何か。そして第 1 講から始まった旅を経て、「当たり前の毎日」について今どう答えられるか。

【今日の主軸となる基盤】

A 市場	B インフラ	C 生活	D 制度
◎ 貿易・国際分業・為替	◎ グローバルサプライチェーン	○ 生活と国際経済のつながり	◎ 国際ルール・地政学的リスク

📖 ケンジとアカリの物語 第 10 話 スマホの中の、世界

ある日、ケンジのスマホが壊れた。修理に出すと「この部品、今品薄で 3 週間かかります」と言われた。「なんで？」と聞くと「台湾の工場が被害を受けて、半導体の供給が滞っているんです」と店員が言った。

ケンジは思った。「台湾の工場の話が、俺のスマホに関係するのか」

アカリはそのニュースを別の角度で見ている。「スマホだけじゃないよ。車も家電も医療機器も、みんな海外の部品を使ってる。それって、すごく便利だけど、すごく脆いってことじゃないかな」

ケンジが続けた。「第 2 講のカレーライスの話に似てる。あのとき『知らない人たちの分業と交換でカレーが届く』って学んだ。今回はそれが国境を越えているだけだ」

アカリが言った。「でも国境を越えると、もっと複雑になる。言葉が違う・ルールが違う・お金の種類が違う。それをつなぐ仕組みって何だろう」

ケンジはもう一つ気になることがあった。「最近、円安って言葉をよく聞く。うちのお母さんが『輸入品が高くなった』って言ってた。円安って何が起きてるんだろう」

アカリは少し考えてから言った。「お金にも『価格』があるってこと？ 円の価値が下がると輸入品が高くなる。でも輸出品は安くなるから、輸出する企業は儲かる。誰かが得して誰かが損する——これもまた第 4 講の競争の話に似てる」

——ケンジとアカリ、二人の問いはどこが違うか。

ケンジ：「国際的な分業とつながりはなぜ生まれ、どんな恩恵とリスクをもたらすのか」

アカリ：「国際経済のつながりの中で、恩恵を受ける人と損をする人は誰か。為替はどう影響するか」

グループで話し合おう

国際的なつながりは恩恵をもたらす

世界中の得意なものを交換し合うことで、一国だけでは作れないものが見える。スマホ・自動車・医薬品……国際分業なしに現代の生活は成り立たない。（ケンジの問い）

国際的なつながりはリスクも生む

台湾有事・パンデミック・戦争———か所が止まると世界中に影響が広がる。円安は輸出企業には有利だが、輸入品に頼る家庭・中小企業には打撃になる。恩恵は全員に平等ではない。（アカリの問い）

▶ この場面が教えてくれること

国際経済は「第 2 講の分業と交換が国境を越えたもの」だ。恩恵は大きいけど、つながりが深いほどリスクも広がる。そして為替という仕組みが、国際取引を可能にすると同時に新たな不平等を生む。

◎ 別の切り口

【より身近な切り口】「今日の朝ごはんに使われた食材はどこから来たか——食料安全保障という問い」

【より深い切り口】「経済安全保障とは何か——半導体・食料・エネルギーを自国で確保することの意味とコスト」

【授業の流れ】

ステップ 1 物語を読み、「国境を越えた分業」を実感する（8 分）

「スマホの部品がどこから来るかを知っていたか」をグループで確認させる。第 2 講「カレーライス」との接続を確認する。

✦ 交通整理

「第 2 講のカレーライスが国境を越えた版だ」という気づきを引き出す。「国際分業の恩恵」（安く良いものが手に入る）と「リスク」（どこかが止まると全部止まる）を黒板に並べる。

ステップ 2 為替の仕組みを平易に説明する（12 分）

「お金にも価格がある」という切り口で為替を説明する。円安・円高が日常生活にどう影響するかを整理する。

状況	影響を受ける人	内容
円安（1 ドル＝100 円 →150 円）	家計・中小企業	輸入品（食料・エネルギー）が高くなる
円安	輸出企業	海外での価格が相対的に安くなり競争力が上がる
円高（1 ドル＝150 円 →100 円）	家計・輸入業者	輸入品が安くなる
円高	輸出企業	海外での価格が上がり競争力が下がる

✦ 交通整理

「円安は良いことか悪いことか」と問うと「どちらでもある」という答えが出る。アカリの問い「誰が得して誰が損するか」に直結する。「為替は第 4 講の競争の話と同じく、恩恵は全員に平等ではない」ことを確認する。

ステップ 3 国際経済のルールと地政学的リスクを紹介する（8 分）

「国境を越えた取引を可能にするルール」（WTO・EPA・FTA など）を平易に紹介する。同時に「地政学的リスク」（戦争・政治的対立が経済に影響する）という現代的な問いを加える。

✦ 交通整理

「国際ルールがなければ国際取引は成立しない——第 3 講の信頼の仕組みが国際版だ」という接続を示す。「経済安全保障」という言葉を紹介し「国際的なつながりと自国の安全保障のバランス」という問いを立てる。深入りせず「高校・大学でさらに考えるテーマ」として予告する。

ステップ4 第1講への帰還・10講全体の締め括り（12分）

「第1講のときの自分の答え」と「今の答え」を並べて書かせ、どう変わったかを確認する。

✦ 交通整理

「第1講のとき、当たり前の毎日はなぜ成り立つのかに、どう答えたか」を思い出させる。今の自分の言葉で書かせる。変化が「学び」の証拠だ。ケンジとアカリ、それぞれの視点でどう成長したかを振り返らせる。

✍ 板書案

★ 国際経済と「当たり前の毎日」

国際分業：得意なものを世界で交換し合う

＝ 第2講の分業と交換が国境を越えたもの

恩恵：安く良いものが手に入る・技術が進歩する

リスク：どこかが止まると世界中に影響が広がる

為替：お金にも「価格」がある

円安 → 輸入品が高くなる・輸出企業には有利

円高 → 輸入品が安くなる・輸出企業には不利

→ 恩恵は全員に平等ではない（第4講と同じ構造）

国際ルール（WTO・EPA等）＝信頼の仕組みの国際版

地政学的リスク：政治・安全保障が経済に影響する

★ 第1講への帰還

当たり前の毎日が成り立つのは：

市場・インフラ・生活・制度の4つの基盤が

国内だけでなく国境を越えてつながりながら

信頼によって支えられているから → そのつながりは誰かが意図的に作り維持している

▶ 体験活動：スマホ解体マップ

グループで「スマホ一台に使われている主な部品・素材・製造国」を紙の上にマッピングする。

部品・素材	主な生産国	もし止まったら
半導体	台湾・韓国・米国	スマホ・車・家電が作れなくなる
レアメタル（リチウム等）	コンゴ・チリ・オーストラリア	バッテリーが作れなくなる

液晶パネル	中国・韓国・日本	画面がなくなる
設計・OS	米国	動かせなくなる
組み立て	中国・ベトナム・インド	製品にならない

追加の問い：

- ・「このつながりのどこが一番リスクが高いか」
- ・「日本はどの部分に強みを持っているか」
- ・「経済安全保障とは何を守ることか」

確認問題（○×＋解説）

Q1 「国際的な分業と貿易は、各国が得意なものを専門に生産して交換し合うことで、全体として豊かになれるという考え方に基づいている。」

→ ○ 【解説】これが貿易の基本的な根拠です。第 2 講で学んだ「分業と交換」が国境を越えたものが国際貿易です。全ての国が全ての商品を自国で生産しようとするより、得意なものに集中して交換し合う方が全体として効率的になります。ただしその恩恵が全員に平等に届くわけではないことは第 4 講と同じ構造です。

Q2 「円安になると輸入品の価格が下がり、家計にとって生活費の負担が減る。」

→ × 【解説】円安になると輸入品の価格は上がります。1 ドル = 100 円のときに 100 ドルの商品は 1 万円ですが、1 ドル = 150 円になると同じ商品が 1 万 5 千円になります。円安は輸出企業には有利ですが、食料・エネルギーなど輸入に頼る家庭・中小企業には負担増になります。

Q3 「国際的な経済のつながりが深まるほど、一か所で問題が起きたときの影響が世界中に広がりやすくなる。」

→ ○ 【解説】グローバルサプライチェーンが深まると恩恵も大きくなりますが、リスクも広がります。2020 年のコロナ禍でのマスク・医療機器不足、2021～22 年の半導体不足による自動車減産、2026 年のホルムズ海峡封鎖など、一か所の問題が世界中に波及した事例が近年相次いでいます。

Q4 「WTO などの国際的な貿易ルールは、国境を越えた取引における『信頼の仕組み』として機能している。」

→ ○ 【解説】第 3 講で「経済の根っこは信頼であり、信頼を作る仕組みがある」と学びました。国際取引でも同じです。WTO・EPA・FTA などは、異なる国の間での取引を可能にする「信頼の仕組みの国際版」です。ただし、その信頼の仕組みが大きく揺らいでいるのが現状です。

Q5 「経済のグローバル化は全ての国・全ての人に均等な恩恵をもたらすため、誰も損をしない。」

→ × 【解説】グローバル化の恩恵は全員に平等ではありません。安価な輸入品の恩恵を受ける消費者がいる一方、輸入品との競争で仕事を失う労働者もいます。円安で利益を得る輸出企業がある一方、輸入コスト増に苦しむ中小企業・家庭もあります。「誰が得をして誰が損をするか」というアカリの視点は、国際経済を見る上でも不可欠です。

◇ 振り返りの問い

1. 「スマホの部品が 20 か国以上から集まっている」ことは、第 2 講の「分業と交換」とどうつながっているか説明しよう。

【解答例】第 2 講で「得意なことに集中して交換し合う分業」が効率を高めることを学んだ。国際分業はその国境を越えた版だ。半導体は台湾・韓国が得意、設計はアメリカが得意、組み立てはコストの安い国が担うという形で世界規模の分業が成立している。恩恵は「安く良いものが手に入ること」、リスクは「どこかが止まると全体が影響を受けること」だ。

2. 円安が「良いこと」でも「悪いこと」でもあるのはなぜか。具体的な例を挙げて説明しよう。

【解答例】円安は輸出企業（自動車・電機など）には「海外での価格が相対的に安くなり競争力が上がる」という恩恵がある。一方、食料・エネルギーなど輸入に頼る家庭・中小企業には「仕入れコストが上がる」という負担増になる。「良いか悪いか」は誰の立場から見るかによって異なる。これは第 4 講「競争の恩恵は全員に平等ではない」と同じ構造だ。

3. 第 1 講から第 11 講を振り返り、「当たり前の毎日はなぜ成り立つのか」を今の言葉でまとめよう。ケンジの視点とアカリの視点の両方を使って書こう。

【解答例】ケンジの視点：市場・インフラ・生活・制度という 4 つの仕組みが国内だけでなく国境を越えてつながり、バランスを保ちながら動いているから。その根底には人と人・国と国の信頼がある。しかしそのつながりは自然にできたものではなく、誰かが意図的に作り維持してきたものだ。アカリの視点：そのつながりの恩恵は全員に平等ではない。誰かが得をするとき、誰かが損をしていることがある。「当たり前の毎日」が成り立つためには、つながりの恩恵が届かない人・取り残される人への目線が必要だ。二つの視点が合わさって初めて、経済社会の全体が見えてくる。

★ 自分の言葉へ（最終回）

「確認問題と振り返りが終わりました。では最後に。ノートを第 1 講のページに開いてください。第 1 講のとき書いた『当たり前の毎日はなぜ成り立つのか』への答えを読み返してください。そして今の自分の答えを、その下に書いてください。何が変わりましたか。」

◆ 今日の持ち帰り・単元全体の持ち帰り

私たちの経済は国境を越えてつながっている。そのつながりは恩恵とリスクの両方をもたらす。そして「当たり前の毎日」は、市場・インフラ・生活・制度が国内外でつながり、信頼によって支えられることで成り立っている。

10 講を通じて、ケンジとアカリは二つの視点を手に入れた。「仕組みとして何が起きているか」と「誰が得をして誰が困っているか」——この二つが合わさって初めて経済社会の全体が見える。

▼ 教師メモ

【ねらい】

国際経済の入口として「分業と交換の国際版」という位置づけを明確にする。第 2 講との接続を意識的に行う。そして第 1 講への帰還で「学びの変化」を可視化することが最終ゴール。

【為替について】

為替の仕組みは中学の学習指導要領に含まれています。「円高・円安の定義を覚える」より「為替の変化が日常生活に影響する」という実感を持たせることを優先してください。

【地政学的リスク・経済安全保障について】

近年急速に重要性が増しているテーマです。深入りする必要はありませんが「経済のつながりは政治・安全保障とも切り離せない」という認識を持たせることが重要です。

【観点別評価】

① 知識・技能

A：貿易・国際分業・為替・グローバルサプライチェーンといった国際経済の仕組みを正しく理解し、スマートフォンが手元に届くまでの過程に即して説明できる。

B：貿易や為替という言葉は知っているが、国際経済の仕組みを具体例に即して正しく理解して説明することが難しい。

C：国際経済の仕組みを理解できていない。

② 思考・判断・表現

A：経済が国境を越えてつながることの恩恵とリスクが全員に平等ではないことを踏まえ、第 1 講からの学びを振り返りながら「当たり前の毎日」を支える仕組みについて自分の考えを筋道立てて表現できる。

B：国際経済の恩恵とリスクについては説明できるが、これまでの学びを振り返って自分の考えとしてまとめることが難しい。

C：国際経済のつながりを単独の話題として捉え、これまでの学びと結びつけて考えられない。

③ 主体的に学習に取り組む態度

A：全 11 講を通じた学びを振り返り、「当たり前の毎日」を支える仕組みに自分がどう関わっていくかを、自分の言葉で粘り強く考えようとしている。

B：国際経済の事例には関心を持つが、これまでの学び全体を振り返って自分の関わり方を考えようとする姿勢は限定的である。

C：これまでの学びを振り返らず、単元のまとめを他人事として受け止めている。

【C の生徒を引き上げるヒント】

体験活動（スマホ解体マップ）で国際分業を可視化させ、確認問題 Q1・Q5 の解説を第 2 講の分業の学びと結びつけて説明させる。

【学習指導要領との対応】

公民的分野「私たちと経済」——貿易と国際経済、為替の仕組み、国際社会における日本の役割。

単元のまとめ ケンジとアカリの旅の終わりに

この単元を通じて、ケンジとアカリは経済社会の仕組みを少しずつ自分のものにしていきました。以下は、10 講で気づいたことの記録です。

第 1 講 停電の夜

「当たり前の毎日」が突然なくなることを知った。市場・インフラ・生活・制度という 4 つの仕組みがつながって毎日が成り立っていることに気づいた。

第 2 講 カレーライス

給食のカレーが、知らない誰かの分業と交換のつながりで届いていることを知った。そのつながりのどこかが切れると自分の生活に影響が出ることも。

第 3 講 お金と信頼

経済の根っこは信頼であることを知った。信頼は信用へ、信用は金融へとつながる。お金もまた「みんなが価値を認める」という信頼で成り立っている。

第 4 講 競争とルール

競争は効率を高めるが、その恩恵は全員に平等には届かない。取り残される人が生まれる。競争とルールは対立していない——ルールが競争を守る。

第 5 講 情報の差

情報の差は市場だけでなく社会のあらゆる場面にある普遍的な構造だ。それでも社会が機能するのは「信頼を作る仕組み」があるから。信頼→信用→金融という連鎖が経済を支えている。

第 6 講 労働と権利

力の差がある場所には制度が必要だ。働く人の生活・尊厳が直結しているため、労働は普通の商品と同じルールでは守れない。今ある権利は声を上げて勝ち取られてきたものだ。

第 7 講 効率と公正

採算（効率）と誰でも使えること（公正）は別の物差しだ。市場だけでは維持できない公益サービスを制度で支える必要がある。どこで線を引くかは市民・有権者が決める。

第 8 講 フリーライダーと税

「自分一人くらい……」が積み重なると全員が困る。だから税という「みんなの会費」が必要だ。税を何に使うかを議論することが主権者として経済に関わることの核心だ。

第 9 講 社会保障

人生のリスクは個人だけでは乗り越えられないことがある。社会保障は「弱者への恵み」ではなく、誰もが使い得る「社会の安全網」であり「権利」だ。同時に持続可能にする責任もある。

第 10 講 マクロ経済

個人の合理的な行動が積み重なると社会全体に逆効果をもたらすことがある（合成の誤謬）。財政政策と金融政策はそのバランスを整える社会の舵取りだ。今の判断は将来世代に影響する。

第 11 講 国際経済

私たちの経済は国境を越えてつながっている。その恩恵とリスクは全員に平等ではない。「当たり前の毎日」は 4 つの基盤が国内外でつながり、信頼によって支えられているから成り立つ。

10 講を通じて繰り返し登場した構造

以下の 6 つの構造は、形を変えながら 10 講を通じて繰り返し登場しました。これらを自分の言葉で説明できれば、この単元の学びが定着しています。

- ① 個人の合理的判断 → 社会全体に逆効果（第 4 講・第 8 講・第 10 講）
- ② 力の差・情報の差 → 制度が必要（第 5 講・第 6 講・第 9 講）
- ③ 効率と公正のトレードオフ（第 4 講・第 7 講・第 8 講・第 10 講）
- ④ 制度があっても届かない人がある（第 5 講・第 6 講・第 9 講）
- ⑤ 競争・恩恵は全員に平等ではない（第 4 講・第 7 講・第 11 講）
- ⑥ 権利は勝ち取るものでもある（第 6 講・第 8 講）

ケンジとアカリが手に入れた二つの視点

ケンジの視点	アカリの視点
仕組みとして何が起きているか	誰が得をして誰が困っているか
効率・損得・因果を追う	公正・弱者・格差を問う
「なぜそうなっているのか」	「誰のための経済か」
構造を分析する	影響を問い直す

この二つの視点は対立しているものではありません。どちらか一方だけでは経済社会の全体は見えません。二つの視点が合わさったとき、「なぜこうなっているのか」と「誰のために変えるべきか」という問いが生まれます。

そしてその問いに向き合い続けることが、主権者として経済に関わることの出発点です。

「当たり前の毎日」は、誰かが守ってくれているものではない。

みんなで作り続けているものだ。

そしてその「みんな」の中に、あなたも入っている。

付録 1 学習指導要領で取り上げている経済用語との対応表

中学公民分野の指導要領で扱われる経済用語 36 語について、本プランの本文でどこまで取り上げているかを整理したものです。○＝明示的に取り上げている／△＝関連する内容はありますが用語としては未使用／×＝取り上げていない、で判定しています。

分類（学習指導要領）	用語	扱い	本プランでの該当・備考
経済概念・理論	効率と公正	○	第 1・4・7 講など複数講で明示的に使用（第 7 講は「効率と公正のトレードオフ」が主題）
経済概念・理論	希少性	○	第 2 講の板書案で明示（分業の前提として）
経済概念・理論	トレード・オフ	○	第 3 講「効率とデジタル格差・公正のトレードオフ」、第 7 講で明示（表記は「トレードオフ」）
経済概念・理論	需要と供給	○	第 4 講で価格決定の考え方として言及（「需要が増えると価格は上がりやすい」）。グラフの詳細な扱いはなし
経済概念・理論	均衡価格	×	記載なし
経済概念・理論	市場価格	×	記載なし（「価格競争」はあるが「市場価格」という用語としては未使用）
経済概念・理論	公共料金	×	記載なし
経済概念・理論	利潤	△	「利潤」ではなく「利益」という言葉で言及（第 4・8・11 講など）
経済概念・理論	生産性	×	記載なし
経済概念・理論	景気変動	○	第 10 講の主軸テーマ
経済概念・理論	インフレ・デフレ	△	「インフレ」「コストインフレ」は第 10 講で言及。「デフレ」は記載なし
経済概念・理論	円高・円安	○	第 11 講で明示（円安の影響を具体例とともに説明）

経済概念・理論	国際分業	○	第 11 講の主軸基盤として明示
制度	市場経済	×	「市場」という基盤概念は全講で扱うが、「市場経済」という用語としては未使用
制度	契約	○	第 3 講で明示（フリマアプリの取引を契約として扱う）
制度	株式会社	×	記載なし
制度	有限責任	×	記載なし
制度	所有と経営の分離	×	記載なし
制度	労働三権	○	第 6 講で明示（団結権・団体交渉権・争議権）
制度	日本銀行（中央銀行）	○	第 3 講で明示。ただし「中央銀行」という呼称自体は未使用
制度	直接税・間接税	○	第 8 講で明示
制度	累進課税	○	第 8 講で明示（消費税の逆進性と対比）
制度	公債	△	「公債」ではなく「国債」という言葉で言及（第 8・10 講）
制度	社会保障制度（四つの柱）	○	第 9 講で「社会保障の 4 本柱（社会保険・公的扶助・社会福祉・公衆衛生）」として明示
制度	外国為替市場	△	「為替」「円高・円安」は第 11 講で扱うが、「外国為替市場」という用語としては未使用
制度	WTO	○	第 11 講で明示
制度	EPA/FTA	○	第 11 講で明示（WTO・EPA・FTA として併記）
規制政策名	独占禁止法	○	第 4 講で明示
規制政策名	公正取引委員会	○	第 4 講で明示

規制政策名	消費者基本法	×	「消費者保護」「消費者の権利」への言及はあるが、法律名としては未使用
規制政策名	製造物責任法（PL法）	×	記載なし
規制政策名	労働基準法	○	第 6 講で明示
規制政策名	男女雇用機会均等法	×	記載なし
規制政策名	財政政策	○	第 10 講で明示
規制政策名	所得再分配	×	累進課税を通じた再分配の考え方はあるが、「所得再分配」という用語としては未使用
規制政策名	金融政策（公開市場操作）	△	「金融政策」は第 10 講で明示。具体的手段の「公開市場操作」への言及はなし

付録 2 索引

プラン全体を貫く重要な用語・概念を 50 音順に並べ、それぞれが登場する講と、本文中での位置づけを示したものです。定期考査の作問や、生徒への用語解説の際にご活用ください。

用語	登場する講	本文中での位置づけ・備考
アカロフのレモン市場（情報の非対称性）	第 5 講	中古車売買を例に、情報の差が市場を崩壊させる理論として教師メモで紹介
エスクロー	第 3 講	「受け取り確認後に支払う仕組み」の専門用語として教師メモで紹介
お金の 3 つの働き（交換手段・価値の尺度・貯蔵）	第 3 講	お金の本質を説明する基本枠組みとして板書に整理
解雇予告手当	第 6 講	突然解雇された場合に必要となる手続きとして解説

買い物難民	第 4 講	競争の恩恵から取り残される立場の具体例として登場
寡占	第 4 講	コンビニ 3 社の価格競争の例として、今日の主軸となる基盤に明記
為替（円高・円安）	第 11 講	為替が輸出入企業・家計に与える影響を対比して説明
外部性（外部不経済）	第 8 講	「取引の外側に出るコスト」として、工場の煙の例で紹介（用語自体は教師メモにとどめる）
希少性	第 2 講	分業が生まれる前提として板書案に明記
逆進性・累進課税	第 8 講	消費税の逆進性と所得税の累進課税を対比して説明
グローバルサプライチェーン	第 11 講	スマートフォンの部品が 20 か国以上から集まる例で説明。今日の主軸となる基盤に明記
経済安全保障・地政学的リスク	第 11 講	半導体・食料・エネルギーの自国確保という現代的テーマとして紹介
経済の三主体（家計・企業・政府）	第 10 講	マクロ経済の基本概念として板書に整理
契約	第 3 講・第 6 講	フリマアプリの取引やアルバイトも契約であることを確認
ケンジの視点／アカリの視点	第 1 講・第 2 講・第 3 講・第 4 講・第 5 講・第 6 講・第 7 講・第 8 講・第 9 講・第 10 講・第 11 講	「仕組みとして何が起きているか」（ケンジ）と「誰が得をして誰が困っているか」（アカリ）という、全 11 講を貫く二つの視点
憲法第 25 条（生存権）	第 9 講	生活保護が権利であることの根拠として確認問題で紹介
公正取引委員会	第 4 講	独占禁止法とあわせて「市場の審判」として紹介

効率と公正	第 1 講・第 4 講・第 7 講	第 7 講で中心的に扱う対概念。第 1・4 講から伏線として登場
国債（リカードの中立性）	第 8 講・第 10 講	「将来世代の負担」という見方と「国民の資産でもある」という見方の両方を紹介
国際分業	第 2 講・第 11 講	第 2 講の分業と交換が国境を越えたものとして第 11 講で回収
国税・地方税	第 8 講	税の集め先の違いとして板書に整理
コストインフレ	第 10 講	供給側の要因として、需要側の要因（節約）と対比して説明
合成の誤謬	第 8 講・第 10 講	個人の合理的な行動が社会全体には逆効果になる現象として第 10 講の中心テーマ。第 8 講のフリーライダー問題と同じ構造として接続
最低賃金	第 6 講	労働基準法が定める保護の具体例として、ブラックバイト発見ゲームで扱う
財政	第 8 講	税を集めて使う仕組みとして板書に整理
財政政策・金融政策	第 10 講	政府が行う財政政策と日本銀行が行う金融政策を対比して説明
社会的ジレンマ	第 1 講	「誰かがやるだろう」という個人の合理的判断が積み重なり誰も動かなくなる構造として確認問題で解説
社会保障の 4 本柱（社会保険・公的扶助・社会福祉・公衆衛生）	第 9 講	社会保障制度の全体像として板書に整理
囚人のジレンマ（ゲーム理論）	第 8 講	フリーライダー問題の体験活動がこの構造と同じであると教師メモで解説
主権者教育	第 7 講・第 8 講	税の使い道や公共サービスの存続を市民・有権者が判断するという文脈で接続

少子高齢化	第 9 講	社会保障を支える世代とその恩恵を受ける世代のバランスの課題として説明
消費生活センター（188）	第 3 講・第 5 講	トラブル時の相談窓口として繰り返し紹介
食料自給率	第 1 講・第 2 講	約 38%という数字を導入・確認問題で繰り返し使用
信頼→信用→金融	第 2 講・第 3 講・第 5 講・第 11 講	経済のつながりを支える連鎖として繰り返し登場する中心概念
自助・共助・公助	第 9 講	社会保障を支える 3 つの仕組みとして板書に整理
需要と供給（需給曲線）	第 4 講	価格決定の考え方として紹介。ただし完全競争などの前提条件が現実には成立しにくいいため、補助ツールとして扱う方針を教師メモに明記
GDP	第 10 講	社会全体の稼ぎ・景気の目安として平易に紹介（日本の GDP は約 550 兆円という数字も提示）
ステルスマーケティング（ステマ）	第 5 講	情報の差を悪用し信頼を壊す行為の具体例として紹介
WTO・EPA・FTA	第 11 講	国境を越えた取引を可能にするルールとして紹介
直接税・間接税	第 8 講	税の基本分類として板書に整理
トレードオフ	第 3 講・第 4 講・第 7 講	効率と公正など、両立しにくい価値のあいだの関係として繰り返し使用
同一労働同一賃金	第 6 講	正社員とパートの待遇差を考える切り口として紹介
独占禁止法	第 4 講	競争を守るルールとして紹介
賦課方式	第 9 講	現役世代が今の高齢者を支える年金の仕組みとして解説

フューチャーデザイン	第 10 講	将来世代の代理人として現在の意思決定を考える手法として体験活動に導入
フリーライダー問題	第 8 講	第 8 講の中心概念。「自分一人くらい」の判断が積み重なり全員が困る構造
分業と交換	第 2 講	第 2 講の中心概念。希少性→分業→交換→信頼という板書の流れの起点
マクロ経済	第 10 講	経済全体を大きな視点で見る考え方として第 10 講で導入
ユニバーサルサービス	第 7 講	どこに住んでいても一定のサービスを受けられる仕組みとして日本郵便を例に紹介
4 つの基盤（市場・インフラ・生活・制度）	第 1 講から第 11 講まですべて	プラン全体を貫く中心的な分析枠組み。第 1 講で導入し、以降の全講で「今日の主軸となる基盤」として使用
労働基準法	第 6 講	働く条件の最低基準を定める法律として、ブラックバイト発見ゲームで扱う
労働組合法	第 6 講	労働者が自ら団結して交渉・行動する権利を保障する法律として、労働基準法と対比して解説
労働三権（団結権・団体交渉権・争議権）	第 6 講	労働組合法が保障する権利として確認問題で解説

本プログラムの著作権・利用範囲について

本プログラム「シン経済教育プログラム」の著作権は、経済教育ネットワークに帰属します。

ご利用いただけること

学校の授業において、先生方がそのまま使用したり、必要に応じて配布資料として印刷したりすることに限り、自由にご利用いただけます。

ご利用いただけないこと

以下の用途でのご利用はご遠慮ください。

- ・家庭学習用として保護者の方が使用すること
- ・学習塾など、学校教育以外の場での使用
- ・本プログラムの内容を一部または全部利用して、ドリルや問題集など別の教材を作成すること
- ・SNS やウェブサイト等への転載・掲載
- ・その他営利目的での利用

ご利用の際のお願い

本プログラムをご利用の際は、「経済教育ネットワークの教材を使用」である旨のクレジットを明記してください。

あわせて、ご利用いただいた旨を、経済教育ネットワークのウェブサイトにある「お申し込み・お問い合わせフォーム」よりご連絡くださいますようお願いいたします。（本連絡は上記フォームからのみ受け付けております。）

免責事項

本プログラムのご利用によって生じたいかなる損害やトラブルについても、経済教育ネットワークは責任を負いかねます。あらかじめご了承ください。